

PAPERS OF PVM

34

-R. P. 6-1

自昭和六年九月
至同六年十月

滿洲事變

1-247

昭和二十五年十月
旅より提供を受く

1. 常 9 字

[illegible]

胡適之

機密公文三九六号

昭和六年九月十五日

在長春領事 田代重徳

外務大臣 男爵 幣原喜重郎 殿

關東軍司令官 滯長中馬賊跳梁云々

訓示了了タル件

關東軍司令官 本庄中嶋川沿線初度巡視ト云

一昨才三日 滯長 十五日 離長其滯長中 独立守

備隊司令官ニ宛テ当地ヨリ發セラルタル訓示内容

別紙寫し通りナルカ在リ進テ断年先処置ヲ極リ

云々 附屬地、内外ヲ拘ハス必要ノ処置ニ出ツル

旨ニ解セラル、アアリ自然名沿線平均海に新
 タル態ニ出タルモノト観ラルル點アルニシキ右
 新ニ報告ス

}

独立守備隊司令官ニ與ル訓示

最近時匪賊ノ跳梁甚タシク鐵道ノ運行ヲ妨害シ
剩ハ我附屬地ヲ窺フモノ多ク誠ニ憂心ニ堪
エサル所ナリ

我威武ヲ輕視スル是等不逞ノ徒輩ニ對シテハ進テ
斷年ヲル処置ヲ採リ鐵道守備ヲ完テスルト共ニ
帝國在留民ノ不安ヲ一掃スルヲ如努ムヘシ

昭和六年九月十三日

廣東軍司令官 木村 繁

甲子

南参軍冲二九日号

匪賊取締、南連之鉄道守備上訓示セラレニ件

昭和六年九月十四日 南東軍参謀長 三宅光治

奉天總領事 林久治郎殿

近時匪賊が輕油動車ヲ襲ヒ或ハ光器ヲ搜擄

ト多ク我附屬地ニ侵入シ掠奪ヲ行フ等我威

武ヲ輕視スル結果ニ外ナラサルヲ看取シ得ルモ

ノ有之九月十三日当軍司令官ヨリ独立守備隊

司令官ニ左ノ如ク訓示セラレ候由及通牒候

「近頃匪賊、跳梁甚しく、鉄道、運行が妨害
され、我附属地を窺う者多し。ハ實に
寒心に堪へざる所なり。我威武を輕視せん
此將不逞、徒輩に對して進了断年たるに
堪へず。執り、鉄道守備をなさん。其に帝國在
る民、不安を一掃せん。」「努力へん」
進而向後、守備隊に我附属地を侵犯せし
匪賊、ハ勿論附属地を襲はんとスルモノに對して
之を脅懾せん。爲進了兵力を使用スルに至らん。
元より、鐵道保護上、軍當然の任務、範圍内ニ

廣く見ると確信致し候へ共、其実行に當り予の貴
方隸下諸精肉と密接し協力ヲ要スヘク事情
御諒義に上可然御配慮願上候。

電報譯

九月

十八日 十一時 十一分 發
十九日 前 十一時 二十分 著

日支兵衝突事件之關係

才一報

一奉天憲兵分隊兵裝

十八日午後十時半頃奉天東北方向約有

二平北大學北方滿鐵線附近二處有日軍鐵

道守備隊卜支那軍隊卜衝突之目下在戰中

昭和六年

棒打

九月十九日 前着

幣原外務大臣

林總領了

形勢六一六号

十八日午後十時半滿鉄本線柳條溝(当地北

大營附近)附近鐵道ヲ爆破セルモノアリ 其形勢

一処星十ルニテ我々守備隊ノ出勤ヲ見北太營

附近ニ臨テ日支交戦中ナリトノ警察署報告ニ

接シ不取敢一午收十一時

昭和6

奉天
本省

九月十九日
十九日午前

幣原外務大臣

林總領事

才一八号

十八日午後十一時十五分交渉署日本科長ヨリ森岡

領事宛電報云 三日日本兵、北大營ヲ包圍圍シ

ツ、アリト！報告アリ依テ本林岡、女保衛隊突ヲ

出衆ル大小ヲ、レハル為相互ニ努カスル様様者ヒ

タルカ本那側ハ無抵抗主義ニ出ツル旨語ル由ナリ

昭和6

奉天

九月十九日午前

幣原外務大臣

林總領事

才六二〇号

往電才六一九号ニ号シ

本室の事件ヲ出来得ル丈小ナリニル方針ヲ以テ

我軍及支那側ト聯絡ヲ執ルニ最善、努力ヲ

拂ヒヨアリ

昭和6

奉天
奉省

十九日
九月十九日前着

歸原外務大臣

林銑銀

外六二三号

往電外六二八号之関心

十九日午前零時交渉署日本糾表より更に電報

二日目下日本軍は北大管ヲ包圍せん、ミナラズ北

滿内外に其、占領下ニ在ん趣右ニ對シ中國側

ニ於テは全然無抵抗主義ヲ執リ、アリ右日

本軍側ノ行動ハ如何ナル理由ニ依ルカハ別ニ

御尋ズ、一、元内外人雜居ノ地ニシテ影響

スル所重大ナルヲ以テ砲火ヲ城内ニ波及スル方如キ
ハ絶対ニ防止セラルタキ旨申越シマリタリ然レ
支那側ニアリテハ事件ノ發生ハ支那軍ノ満鉄々
道破壊ニ基因スルニ依リ責任ハ支那側ニ在ル
ヲ告ケ外國人ノ生命財産保護ノ點ニ付テハ
我軍側ニ於テモ充分留意シ居ル旨述ヘ置キ
タリ

昭和6

奉天

九月十九日 午前

幣原外務大臣

林總領事

才六二四号

往電才六二三号ニ関シ

中国側ヨリ數回事件圓滿処理方申出ノ次才

エナリ本官ヨリ坂垣參謀ニ電話ヲ以テ日支兩

國ハ未ダ正式ニ交戦状態ニ入リタムヲ示サ

ルノミナラズ支那側ハ全然無抵抗主義ニ出ツル

旨聲明シ居ルヲ以テ此際不必要ニ事件ヲ

拡大セリル程努力スルヲ肝要ニシテ外交材料ヲ

通之事件ヲ處理スル様セテトシトモ
ルカ同參謀、國家及軍ノ威信ニ關スルヲ以テ
外國居留民ノ保護ニハ努ム、亦モ中國軍ハ我
軍ヲ攻撃セルヲ以テ徹底的ニナル、トノ
軍ノ方針ナリト答ヘ、容易ニ肯スルノ風見ヘサリ
、ト付、本官ヨリ更ニ前記ノ趣旨ヲ繰返シ、其
注意ヲ喚起シ置キナリ、

明治三十四年

奉天
本省

九月十九日
午前
午後

幣原外務大臣

林總領事

才三三〇号

参謀本部建川部長、十八日午後一時、列車

ニテ当地ニ入込ミタリトノ報アリ、軍側ニテハ秘

密ニ附シ居ルモ右ノ或ハ眞実ナルヤニ思ハレ又

滿鉄木村理子、内報ニ依リ、支那側ニ破壊セ

ラレタリト傳テラルル鉄道箇所修理ノ爲滿

鉄ヨリ保線工夫ヲ派遣セルモ軍ハ現場ニ出寄

セシメサル趣ニテ今次ノ事件ハ全ク軍部ノ計畫的

動ニ出テタルモノト想像セラル、

昭和6

奉天
女省

九月十九日前
着

錦原外務大臣

林 總領事

水六三二号

本庄軍司令官ハ十九日午前云時臨時列車ニテ
旅順宛當地ニ向ハル旨軍側ヨリ通報アリタリ

昭和6

奉天
奉省

九月十九日
左
前發
着

幣原外務大臣

林總領事

才六二五号

陸電才六一八号ニ関シ

各方面ノ情報ヲ綜合スルニ軍ニ於テハ滿鉄沿線

各地ニ亘リ一斉ニ積極的行動ヲ開始セムトスルノ

方針ナルカ如ク推察セラルル本官ハ在大連内田總

裁ヲ通シテ軍司令官ノ注意ヲ喚起スル様措

置方努力中ナルモ政府ニ於テモ大至急軍ノ行動

差止メ方ニ付適當ナル措置ヲ執ラレムヲ希望ス

REPRODUCED

昭和6

奉天

九月十九日前

幣原外務大臣

林總領事

才三三三三

十九日午前六時迄ノ状況（警察報告）左ノ通り

一、高埠地及辺内内ハ大体全部我軍ノ占領セラレ本

朝未明省城ハ西門ノ一角ヲ占領セリ

二、北大營ハ本朝二時半完全ニ占領セラレ支那軍

隊ハ全部東方ニ退却セリ工業区内追撃砲工

廠及無線電台モ未明占領セラレタリ

三、北寧線ハ滿鉄ヲクハス點ニ於テ遮断工事ヲ

施_ニ此_ニ支那_ニ通_スル_ル電信_ニ強_クハ_ハ全部_ヲ切断_セラル_ルタリ
四師團司令部ハ午前四時半当地到着

昭和6

奉天省

九月十九日前
着

幣原外務大臣

林總領事

才六三七号

昨夜十時半頃爆破廿二号柳条溝附近ノ満鉄線
ハ今朝六時頃修理完了列車ノ運行ヲ開始セリ

昭示6

奉天
本省

九月十九日
光緒

幣原外務大臣

林總領事

才六四四号

關東軍司令部十九日正午奉天之移リ事務所

附屬地大廣場東拓ノ樓上ニ置ク

昭和6

奉天

九月十九日午後
左着

幣原外務大臣

林總領事

才四七号

十九日午後二時軍司令官ニ会见シ今回ノ事件就
是後本和官カ事件ノ拡大ヲ防カントシテ根垣
參謀ニ申入レタル希望ヲ始メ對支那側及外人
ニ對スル處置其他諸般ノ狀況ヲ説明シ對外人
關係ノ重大性及治安維持ノ必要ヲ語リ本官
尚出來得ル夫事件ノ拡大セサル事ヲ希望スルモ
對外人關係及治安維持其ノ他カニ對シ左カヲ要

今予軍ニ協力スル覺悟アル旨ヲ申シタルニ軍司令
官ハ好意ヲ謝シ數日前沿線巡視ニ當リ各軍隊
ニ對シ有事ノ日ニ備フル爲常ニ充テ用意ヲ急
ラサルハキコトヲ命シタルニ決シテ早マリタル行動ニ出
ツルヲトナキ様嚴ニ訓戒シ置キタルニ昨夜支那兵ノ
滿鉄破壊ニ引續キ附近ニ演習中ノ我守備兵
ニ對スル攻撃トナリ重大ナル事態ヲ惹起ス
ルニ至リ自今ハ昨夜十時旅順ニ歸着シ僅ニ一
時間後ニ報告ニ接シ事ノ意外ニ驚キタル事
茲ニ至リテ沿線ノ治安維持ニ全力ヲ盡ササル

「カラス其ノ爲ニ」總領了ノ協力ニ俟ツヤ切ナルモ
ノアリト述ハタルニ依リ今後ノ密接ナル聯絡ニ因シ
打合ヲ遂ケタリ、

昭和6

奉天
本省

九月十九日
午後
著

幣原外務大臣

林總領事

水六四八号

結電水六四七号ニ関シ

軍司令官ノ談ニ依リ、当地ハ幸ニ支那軍ノ退却ニ

依リ表面ニ緩落ヲ告ケタルモ、長春ニ殆クハ今尚

戦闘終結スルニ至ラサルカ多ク、今日中ニハ緩落

ヲ告ケサルモノト豫期シツツアリ、朝鮮ヨリ約一ヶ旅

團一隊ヲ隊リ、倉庫ノ應援隊二十日朝当地ニ着スル

第十ルカ兵ヲ令シ、處軍トシテハ新民屯ニ駐ル

遼河、鉄橋迄ハ何弄カ、指墨ヲ房ス必要アリト考
フルモ四洩線等ニ対シテハ未タ何弄、計劃ヲ有シ
居ラス云云

昭
和
6

奉天女省

九月十九日 前着

幣原外務大臣

林總領了

冲六五四号

我軍、城内を占領し、衛戍地司令官、名義で、
用ひ、日本軍、城内を占領し、臨時治安維持を
任するに、旨、布告し、現に事実上戒嚴命令を
敷き居る。

昭和6

奉天
本省

九月十九日
廿日
前着

幣帛外務大臣

林總領事

計五八号

当地域内高埠地ト支那側警備力全然消滅

1 状態ニ在ル如我方現在、兵力ニテ治安維持

ニ充分ナルヲ得、支那側並ニ外國人側ニ於テ

モ此點ニ付多大ノ危機ヲ拘ルモノ以テ、是

双方民間有力者ニ依ル治安維持會ヲ組織セ

シ、我陸軍ノ監督一下ニ治安維持ニ當ラセム

移打合七十三、陸軍側ニテモ異存ナキニ付、明

日支關係者集會要綱協議ノ答

昭和6

北平
本省

九月十九日
左 著

幣原外務大臣

矢野参事官

牙四一七号

往電牙四一五号ニ関シ

十九日朝学良ハ江蘇^蘇左ノ通り外強セル趣ナリ

事件ニ付^二ハ昨夜^一十時以迄頻々ト報告アリタ

ルカ自今ハ昨夜十二時日軍ニ対シテハ絶対無抵抗

抗ニテ武装解除ニモ甘ニス、キ旨訓令済ミナリ

支那側ノ絶対無抵抗ノ態度ニ願ミ事件ハ之以

上進展セラルモハト思考シ居リ

昭和6

滿鉄樺州
省

十九日午後
二十日前着

幣原外務大臣

内田總裁

本回、事件ノ擴大性ニ付テハ、領事館員ニ對スル
板垣參謀ノ口吻ヨリ察スルニ滿鉄沿線ニ於ケル支
那側兵用地ノ軍事占領續行スルモノト思ハル風
域ニ、進軍ハ其一例ナリ支那側ノ態度ハ頻々
總領事ハ、電話要求ニ依リ察スルニ皇姑屯事
件ノ際、如ク無抵抗主義ヲ執リ此ノ結果外
交上至難ナル事態ヲ惹起スルハ想像ニ餘リ
リ此、軍事占領ノ理由ハ北大營ニ屬スル支那兵力

鉄道ヲ破壊セリト云フニアルカ唯今迄我社保線係
ヲ三度現場ニ差向ケタルモ工場ヲ拒絶セラレ或ハ
ールヲ外セリトカ或ハ爆弾ニテ破壊セリトカ情報
区々ナリ今回軍隊出動ノ計畫ハ既ニ十四日以来
非常演習トシテ豫行セラレタリ
撫順守備隊長ノ密抗社員等ニ極秘トシテ傳
ハシ軍事行動ノ時期ハ一日遅レシモ時刻ハ符
節ヲ合シ而モ亦一目標トシテ支那飛行機格
納庫ノ附近ト稱セシト今占領中ノ北大營ニ外ナ
ラズ事件ノ發生セシ日ノ朝野勢力連川少得ト

個人ノ人物安奉ニ依リ来奉セリ其他種々ナル情
報ヲ綜合シ我軍今回ノ行動ハ豫テ御座セシ豫定計
畫ノ實現ト推定セラル將又支那側ノ無抵抗態
度ト我軍事情勢ニ伴フ小事故カ在留外人ヲ
刺戟シ世界ノ輿論カ我方ニ不利ナル傾向ヲ現
ハシ今迄ニ在リタル對外政策益々難局ニ陥ルヤ
ナ否ハ慮ニ堪ヘス

昭和6

滿鉄構内
本省

九月十九日
二十日前着

幣外務大臣

内田滿鉄總裁

冒頭脱

拡大之重大事態ヲ醸セルニ付、特ニ閣下、深

其ナル考慮ヲ煩ハス唯、本年十月九日午前五時迄

、我社各駅ヨリ、報道ヲ綜合スルニ奉天ニ集

中セラルヘキモノ、撫順、鉄嶺、連山関、海城、鞍

山、遼陽、本溪湖、長春、公主嶺ヨリ、兵三々

五百野砲二十四山砲二十四ト推算セラル、山中戦

、胸算、南京、安東、鶏冠山橋頭ヨリ、五百

ノ兵ヲ鳳凰城ニ向ハシテ、我カ軍事行動ノ實現
セシモノハ奉天ニ於テハ飛行機、野砲ヲ保有セ
ル北大營兵營占領シ支那側ハ多少抵抗中、右
兵營ノ進路トシテ奉天城ノ内突破占領セリ
尚城内邦人ハ滿鉄公所ニ收容中、

昭和6

上海
奉省

九月十九日
煥庵
稿

滿原外務大臣

重光公使

才九七六号

本使署在支各領事宛電報

合才一一八三号

今回、奉天事件ニ関シ、差當り左ノ方針ニ依リ

善処スルヲ致シタレ

一 外部ニ対シ、今回ノ事件ハ中國側軍隊ヲ滿

鉄線路ヲ破壊シ我駐屯軍ヲ襲撃セザル

セバ力為ニ安堵セル地方酌事件ト定之依リ

兩國々交産係ニ悪影響ヲ及ボササル程努力スルヲ

二 中國側地方官憲ニ對シ在留民ノ保護ニ對有
効ナル措置ヲ執ラレムヲ爲メト密接ナル聯絡

ヲ取リ其他在留民保護ノ爲遺憾ナキヲ期スルヲ

三 在留民ニ對シ其行動ヲ幟々楚ニ民國人ヲ

排斥スル力如キ行動ニ出ササル程充分注意

ヲ要スルヲ

昭和6.

長春
本省

九月十九日午後
九月十九日午後

鄭廣外務大臣

田代領了!

才九五号

吉林熙参謀長ヨリ十九日午前六時電話ヲ以テ

並午後二時特使ヲ以テ長春附近ニ在ル支那

軍ニ對シ絶對無抵抗ノ態交テ執リ之ニ違背

スルモノハ死刑ニ処スヘシト命シ来リタル旨公安

局長並外交糾長ハ午前十時頃桐前發シテ

當該ニ事務内務シ之ヲ軍部ニ傳ヘテ此ノ人

命ヲ損セサル様本官ヨリ幹施旋方依頼越ス

此アリ本官ニ移リテ事件ノ拡大防○止ノ見地ヨリ
右申出ヲ容シ早速福旅團長ヲ往訪右ノ次ヲ傳
ハタルニ軍部ハ南嶺軍並支那街軍隊ノ武装解
除及公安局ノ指揮權ヲ我方ニ移スコトニ依リ此ノ
上ノ攻撃ヲ中止スハトノコトナリレニ付長春市
政籌備處長並市公安局長ヲ當館ニ呼寄
セ憲兵分隊長同席ハ上本官幹旋ノ結果半
時三時軍ノ希望通り交渉成立ニ午後四時半
其実行ニ移リタリ、

昭和6

関東廳
本省

九月十九日午後
左

幣原外務大臣

塚本内務大臣

九月十七日

十八日午後十時五十分柳糸溝附近滿鉄線路

ヲ奉天北大管駐劄支那支カ爆破ニ我鉄道

守備隊ヲ襲ヒタルコトニ端ヲ發シ日支軍隊ノ

衝突トナリ在滿各地ノ軍隊ハ大部奉天ニ集

中サレタルト共ニ第一師團司令部及関東武

令部ハ奉天ニ移動セリ

昭和6

上海
本署

九月十九日
二十日
前着

幣原外務大臣

重光公使

外九八六号

往電外九七四号ニ関シ

宋子文ノ提議ハ今日差迫リタル滿洲ノ事態ニハ適

合セサルヤモ知ルサルモ我々ノ事件ニ對スル全体ノ立

場ヲ強ムルコトナルハ且將來之ヲ有利ニ利用スル

コトモ出來ルコトト思ハルルノミナラス中國側空氣

ノ激變ニ對スル備ハトモナル況ナラハ先ヲ主義ト

シテ贊成ヲ表セラレテ然ルヘント存セラル何カノ如

竹趣菟折返之御回系ヲ請フ

右毒魚ノ構成ノ如牛ハ更ニ考量ヲ盡ササルモ可ナリ

ト存ス

電送升八七七二号

昭和六年九月十九日 午後五時十分

姫路市光澤寺前

宇多川旅館

矢吹政務次官

田中外務参事官

奉天附近ニ於ケル日支兩軍衝突事件ニ関シ本日

内閣決定左ノ通り、

九月十八日奉天城外此大宮附近ニ於テ支那兵

が満鉄線路ヲ破壊シタル爲鐵道守備隊ト衝突

突ヲ生ズルニ至リタル此事件ニ就テハ政府ハ事態

ヲ拡大セシメサル様極力努メルノ方針決シ陸

軍大臣ヨリ五三回一趣旨ヲ軍事機密軍司令官ニ以テ

尚事件以上拡大セザルノト思考ス、

電報譯

九月十九日前

一時五十分
四時五十分
五時

第二報

（國東憲兵隊長宛）

十八日午後十時半頃、支那軍隊ハ奉天北方柳樹堡附近滿鉄線ヲ破壊セルニ基因シ、日支軍隊同下交戦中、

二軍ハ直ニ出動準備中ナリ

三、当隊ハ各所ヨリ奉天ニ兵力ヲ集中シ、命ズルハ

若ニ本部ヲ軍司令部ト共ニ奉天ニ出動準備

中、了

○奉天

△占據日時——十九日午前

△軍—————遼東軍司令部

混成旅二十九旅團

野砲兵旅二十六聯隊

步兵旅七十七聯隊

步兵旅七十八聯隊

騎兵旅二十八聯隊

砲兵旅一二大隊

獨立守備旅五大隊

憲兵

飛行機

△市政

支那側行政機關停止ニ依リ臨

時市政ヲ二十日ヨリ實施(附屬地ヲ除ク)

日支人各與一但首魁者ハ日本人

市長監督一ト金融等ニ當ル

地方維持委員會設置(袁金鎧

以下九名、中國人ヨリ成ル二十四日任命)

我憲兵隊指導ノ下ニ同地商務

會ハ中國巡警ヨリ成ル自警團

現在奉天機關

○奉天地方維持會

○瀋陽市商團

一、商民保護治安ニ當ル
一、統系一、省若干十ヶ團

義務隊

團員二千四百人三時百交替晝夜巡邏

通車ハ市政公所ノ認可ヲ得テ執行ス

○遼寧四民臨時維持會

日華双方ノ聯絡

遼寧四民ノ福利ヲ計リ

貧民ノ救

遼寧四民ノ

奉天ノ治安

奉天副市長

經濟委員會ニ於テ協議ス

尚書、市長ノ認可ヲ受ク

○自衛警察當局

組織二十四日(二十日ヨリ迎撃約六

百名ヲ以テ自警團ヲ組織セル

モ二十日午後食糧缺乏、結

料不渡ニテ同盟罷業)

大西大車ニ所以外、歩哨撤去、城内及商埠地ニハ武装監

視兵、密疑者ヲ査問又ハ身

体及所持品ヲ検査ス。

△上様状況――、兵營南係(北大營東大營、

兵工廠、迫撃砲廠、被服廠

糧秣廠及倉庫等)

ラジオコギレトヨシ無電白ハ城北(英堂)ニ電信台長
駐在、城北(市南園)ニ電信台アリ、城北ニ電信也

管理所ヲ設ク、

一)電信所ハ附近區域ニアリ、電ヲ約必要ニ基キ
送電線ヲ取除ケルモ技術者アリハ何時ニテモ使用。

(一) 軍、我海軍官場より無線電台ヲ運用スル

考ナリト

(三) 長波(フーレリヤニ事系統)ハ我軍保官視

察、際、使用ニ堪ハサル程ホニ破壊セ
ラレ居タリ、

官署(市政公署、大元帥府、軍

公署、東北鎮務局、衛戍司令部

部等)

公館(学良別荘、張作相湯玉

麟)通信機關(電報局、交通部

負金、無線電送臺、電信管理

局)

徵稅徵稅十中七一)支那銀行在

庫現大洋、奉天西示、等、市政

經費ニ流用(三)糧食、貯藏倉

糧ヲ沒收

△市況

(一)

食糧ノ配給要シク食糧暴

動等行ハレシ爲糧秣廠ノ

雜穀ヲ貧民救助ニ充テ官

銀經營糧秣ノ雜穀ヲ物價

騰貴抑制ノ爲販賣ニ決定

(二) 市內中國側銀行營業中止

中國、交通兩銀行ハ其日

業務再開然ルニ同地鐵道

紙幣ノ大部分ハ官銀發反以

官銀号ニ付子ハ軍ニ

軍ニテ保管シタルニ

ニテ内容ハ市政經費ノ為

商務總會代表立会ノ上

引出シタル以外手ヲ觸レズト

業銀行ノ發行ニ係ル可以子軍部

ニ於テハ右兩銀行ノ開店ヲ考慮

シツ、アル趣ナリ、

右兩銀行開業ニ際シ地方治安

維持会ハ布告ヲ出シ預金引出シ

ニ制限ナシ又相場一定ス

二十七日滿鉄副總裁ト軍司令官トノ由

ニ理事ヲ来訪セシメ奉天金融調査ニ從事

セシムルコトナリ二十八日林總領下ニ

軍司令官ノ松ニ賛セリ

二十九日朝日理事會奉

三十日銀行統理張學良ト會談ノ答

吉林

△占據日時

二十一日午後六時過

（武裝解除二十二日ノ豫定ナリ

ノ所支那軍之ニ厄セス二十三日

断行）

支那軍ノ事前ニ市中ヲ撤去

△軍
才十五旅團

才十六聯隊

才三十聯隊

（二十四名）

砲兵一個中隊

（二十五名）

廿九日特派員
九日以内
本二対
九日以内
本二対

△占據状況

騎兵一個中隊

独立主備隊

軍器廠及糧秣廠

(官銀號其
他銀二十一日)

一時封鎖廿五日解除

(兵營及官公署ハ二
十二日解放)

市政の総系、市政籌備處長

之之之之之之

支那通信の概況

軍の行動、南スルモノハ發送ス

止ム、電報ハ無制限、電報ハ外方

二子取扱フ、

省政制及官銀号、一部家屋ヲ

借用セル外徴税徴税ノコトナシ、

官銀号、鉄道、郵便局等

二、警備、為兵ヲ置ク、

△治安維持、一、公安局ニ當ラシメ、軍ヲ我警備

司令官カ監督ス、

（吉林省ニ付テハ照參謀長ヲ

シテ之ニ當ラシメ、尤モ此ノ治安維持

持ハ軍政行政ヲ包含スルモノナリ

熙治ハ軍ヲ

衛兵編成各地吉林軍ハ熙ノ節

制下ニ入ル、

従来ノ鎮守使ヲ廢シ警備司令ヲ新設

長春警備司令ニハ松花江

ヲ任命ス

△一般狀況……平穩

商店開市居上！

二十五日以來官銀號以外，金庫

融株南，封鎖ヲ解ク。

特價騰貴、

○敦化

△占领日時……廿三日午後一時半

廿二日午後零時半吉林荒

△軍……一個大隊(四百名)吉林、引揚

△占據狀況……支那軍隊廿二日日本軍到着前

二逃避

(占據時……縣長等逃亡後……)

商務會長卜接街

△治安維持……

△一般狀況……

○、去春

△占據日時

十九日午後

(支那城内、兵無抵抗)

△軍

才十五旅團司令部

才十六聯隊

才十九聯隊

才平聯隊

支那側無線台

要部取外

我憲兵方隊長指揮公安

局之2当12 (武装不解除)

附屬地外ニ
急侵入、

麻線場(十五万坪)

台城内各銀行、松原鐵道(銀行商業準備)

是日午前高松

銀行一着二回高

常連リニ往來

午後一時商店

並リ、

吉長隊長着駐及學
廿日一個小隊ヲ派遣セルカサ
之ヲ撤去シ夫那警務員回ニ
シリタルカ在留民ヲ誘ニ
局守備兵廿名ヲ要クストル

△一般状况：、、、、、市中平穩

○南嶺

△占據日時：、、、十九日午後

△軍

△占據狀況

△治安維持

△一般狀況

○寬城子

△占據日時 十九日午前

△軍 一、一、一、一、一

△占據狀況 一、一、一

△一般狀況 一、一、一、一

兵營ヲ占領

寬城子駅ニ運輸材料監視、
為歩哨ヲ才、ハ、廿一日撤去

發表毎ニ憲兵又ハ警備兵ヲ出入シ

0 敦化

△占领日时 一一一一廿二日午收一时半

同日午收零时半吉林

△軍 一一一一一个大隊

△占领状况 一一一一

△治安維持 一一一一

△一般状况 一一一一

○鳳凰城

△占據日時 十九日午前八時半

(支那兵武装解除)

△軍

△占據状況

△治安維持

△一般状況

○蒙口

△占據日時 十九日午前九時

兵官及商埠地公安隊

△軍

△依據状況、――十九日午前軍司令官ノ名ニテ

軍政ヲ布ケリト云フ、

△治安維持――我軍

支那新警備ニ付、二十日午後十一時、軍政官ノ署名

△一般状況

△水上警察、南紀柳等ノ警備船遠征ヲ解

△支那側航行ノ警戒ハ二十一日午後以後

銃器ヲ携帯セル公安局巡警ヲ配置ス

△年家屯ハ匪賊對シ必要故全部ノ武器ハ

ハ一箇處ニテ公安局ニ假下シ、侵入

△強盜事件ハ晝間ハ軍ト公安局 夜間ハ

△軍政官ハ某ヲ警備ニ願由ニ任セ、公

安局ニ派遣警備車ヲ移送セ、當リ、

△公衆電報ハ廿二日より通

○昌圖

△占據日時：二十日午後八時

△軍

△占據狀況：公安隊武裝解除，

兵營攻擊燒失

△治安維持

△一般狀況：市中平穩

○四平街

△占據日時：

廿二日

午前四時

北鐵路局

警務處

警務處

時內地黨兵右隊、平工於二十四

九月二十日 駐米ハ
公安局各幹部
ヲ召集シ豫言
取締外人店舗
ヲ特ニ巡邏スル
等治安維持
辦法ヲ講究
決定セリ。

△軍、―――留守部隊

△占據状況 公安隊、武装解除ヲ行ハス、

△治安維持、――中國巡警、―――附屬地ハ我軍

△一般状況 及外警密査 疎密アリ

○公主嶺

△占據日時

△軍、―――留守部隊

△占據状況、――公安隊、武装解除ヲ十セルカ如シ

△治安維持、――公安隊、―――商民ヲ以テ保安会組織ヲ行ハシ、

事件ハ保安会
組織ハ公安局
商務會治安ヲ責任ヲ負ハシム
官商密査類差押

△一般狀況、匪賊未襲（廿二日夜）

○本溪湖

△占據時日、十九日午後（公安隊、武裝解除）

△軍、――――

△占據狀況、――――

△治安維持、――――
支那側巡警、等之、當、

△一般狀況、――――

○ 南原

△ 占據日時

△ 軍

△ 占據狀況

△ 治安維持

△ 一般狀況
平穩

○ 新民府

△ 占領日時

廿三日午後六時

奉天同日午後二時半完

△軍
步兵一大隊（才七十七番隊）（平壤）

野砲兵一中隊 牙二十六聯 (龍山)

△満鉄特別編成列車ニテ北寧線ニ入ル

△
占
據
狀
況

△ 治喪宴維持
公安局武器提供

瓦房店

△占據日時、鹽務本局公安隊負武裝解除

△軍軍

△ 占據狀況

△ 治安維持

△一般狀況

○熊岳城

同地震電所瓦房店電町會社營業所附屬地外配

電一ノト

○鄭家屯

△占據日時

廿一日午前（四平街鄭家屯間各

駅警備団ノ武装解除ヲ行フ武署

ハ駅長ニ保管セシメタル必要教區迄

步兵二九
及大隊步兵
及大隊步兵

獨守才五大

計七七

一〇三現在

△四非鐵路局負強制

○慶金銀行（張學良撥定銀行）廢業

官銀號並、通業銀行、本店封鎖、為休業現大洋

流通七、大洋票、三紙幣

滿鉄派遣員二名鄭家屯駐、
（前滿鉄部トナリタリ）

駐長以下駐員、從來通、車輛、運轉、滿鉄負任

業負、之、當元

○支那側、通信線ニ不利、局電信線切断、電報郵送ノ検閲

○大石橋

△公安局ノ武装解除ヲ行ハルカ公安局長商務会長ノ

懇請ニ依リ

一井玄ノ条件ヲ附シ二十三日銃器十五挺並ニ彈

丸并ニ白瓷ノ假下渡ヲナシタリ

△支那側、ハ從來送電計劃アリシモ實現セズ、附屬

地ヨリ送電ナルトナレリ

○海域

1311 中学 / 二十四日 守備隊四十名 二 内部捜索
彈丸及書翰押收

撫順

△占據日時 一一一一 二十日夜?

△軍 一一一一 二 中隊 (?)

△占據狀況 一一一一 (1) 区域 1 炭坑區域 附近村落

(2) 交通要路 五ヶ所 三ヶ所 檢閲

(3) 公安局署、武器押收

△一般狀況

行政

行政、警備以外支那側

(二)金融、交通制限、徴税

昭和6

北平
本省

九月二十日
午後着

幣原外務大臣

矢野参事官

第四二二号

住宅四一二号二関之

学良ハ十九日朝顧維鈞ヲシテ公使館ヲ歴訪す件

概要ヲ説明シ併セテ支那側ニ於テハ日本側ノ紛ハル

力如キ鉄道破壊ノ事實ナリ且目下日本軍ニ

対シ全然無抵抗ノ方針ヲ執リ居リト宣傳セ

レタル趣ナリ一方同日午後五時迄ノ特別列車

運米杜絶記者示名及支那記者副司令官

代表者等合計十七名ヲ奉天ニ向テ出發セシメタルカ
行ハ山海關以北ニ於テ若シ鐵道不通ナレバ支
那船又ハ軍艦ヲ以テ營口至由入滿ニ現状視察ト上
歸平次ヲ宣傳ヲ開始スル計畫ノ由ナリ支那側ハ軍
事行動ニ於テハ無抵抗主義ヲ執リツ、アル一方
宣傳ヲ以テ我方ニ對抗セントスルモノ、如ク觀察
セラル

昭和6

北平
本省

九月廿一日
收着

幣原外務大臣

矢野参事官

外四二五号

往電外四二二号三関之

張学良、十九日附以予左、如平通電、予復之居、

臧主席及荣参謀長、十九日附電報、依、日、

軍隊、昨晚十时、予我北大、常駐屯軍、討之

攻撃、開始、七、我軍、無抵抗主義、予毫毛之

心、對七、予、日軍、遂、我、舍、侵入

予之、燒却、同時、野砲、以予、大學、及、兵、工廠、

攻撃セリ同廠ハ現在尚損失ナキモ、大管迫撃
砲庫ハ破壊サレ迫撃砲工廠モ占領サレタリ官
兵ノ死傷者ハ尚調査ニ俟ツキモ城内外ノ警察
各分隊ハ何レモ日兵ニ射撃セラレ逃散ハ驅逐セ
ラレ無線電台亦侵入セラレタリ日本領事ニ對シ送
次交渉セルモ軍隊ノ行動ハ外交官ノ直接制止
得サル所ナリト稱セラルカ右ハ明ニ不合理ナリ同
事件ハ中國軍隊カ南滿鐵道ノ橋梁ヲ破壊セル
起因セリト爲セルモ右ハ全然捏造ニ係ル本日午
前五時ニ至ルモ尚砲撃ヲ停止セス以上ノ状況ハ

既ニ各國領事ニ通告済ナルモ彼等ハ何れノ表示ヲ

為サズ余等ハ現ニ極力不抵抗主義ヲ堅持シテ

地方ノ荒廢ヲ避ケル様努メツツアリ追テ續報

スハキモ右南京政府ニ轉達アリタトアリ尚最

後ノ報告ニ依リ日軍ハ既ニ今朝六時半省城ニ

入り各官衙通信機關等ヲ占領シ我警察ヲ

驅逐シ北寧路域ヲ遮断セル由ナルカ余後ノ消

息ハ完全ニ阻断サレ状況不明ナリ日本側ハ中國

軍隊カ南滿鐵道ヲ襲撃セルニ依リテ追撃ヲ實行

セリ旨宣傳ノ居ルモ實際ニ於テ我方ハ絶對ニ斯ル事

ヲナク日軍ハ北滿鐵道ニ對シテ王毫モ之ニ抵抗セザリトナリ云云

6

奉天
奉省

九月廿日
廿日
廿日
廿日

幣原

林
總
領
事

中六六〇号

南東軍司令官ハ十九日左記布告ヲ行ハタリ

左記

昭和六年九月十八日午後十時三十分 東北軍一隊

ハ奉天西北側北大營附近ニ駐リ我南滿鐵道ヲ

破壊ニ余威ヲ驅ツテ日本軍守備隊ヲ襲撃シ

彼等ノ通村行為ヲ開始セリ抑々南滿洲鐵道

ハ奉約ニ基キ正當ニ獲得セル日本帝國ノ所有

屬之帝國ハ之ニ對シ他國ヲシテ一指ヲ毛シテ

處ニシテ民國東北軍ニシテ敢テ之ヲ犯セムコトナ

ラス更ニ帝國軍隊ニ對シ銃砲火ヲ開キシカ知ナ

ハ是萬北軍自ラ求メテ明カニ我帝國ニ對シ挑

戰シ来ルモノナリ之ヲ輒ニ續發スル我極意

善行爲トテ列ル処ニ至起セル侮日有動照

此ニ對シ特約感情ノ爲因ニ非テ大國際道

ノ權限ニ據リ行爲ニ慣レタル民國軍ニ

對シテ然ルニ其ノ勢ニ對シテ其ノ

在滿蒙利權

然レトモ熱々思フニ斯ノ如キ暴挙ヲ敢テスルモノ
ハ支那ノ般民衆ニ非スニテ民生ヲ産除シテ頭
ミナル一部野蠻軍閥ノ行為ニ外ナラス本職ハ南
洋保護ノ重責ニ鑑ミ既得利權ノ擁護ト帝
國軍ノ信威ヲ確保シ爲断乎然処置ヲ執ルニ寸毫
王法隳テ非ス兩國ノ府庫總セトスル東亞
軍備ハ一ノ生ノ保障ニ關シテ才力ヲ以
テ盡シテ之ヲ守ルニ盡スルモノナリ
堅固ニ城ニ城ヲ

我々も憂へル也。其の事、
其の事、其の事、其の事、
其の事、其の事、其の事、
其の事、其の事、其の事、

其の事、其の事、其の事、
其の事、其の事、其の事、
其の事、其の事、其の事、
其の事、其の事、其の事、

然るに、其の事、其の事、
其の事、其の事、其の事、
其の事、其の事、其の事、
其の事、其の事、其の事、

其の事、其の事、其の事、
其の事、其の事、其の事、
其の事、其の事、其の事、
其の事、其の事、其の事、

其の事、其の事、其の事、
其の事、其の事、其の事、
其の事、其の事、其の事、
其の事、其の事、其の事、

幣原

在安
有東

九月

廿七

信

米
沃
銀
子

第二九号

李廿日早朝奉宣大猷長史軍司各部派遣，周部

大尉（住香茅）三八号昇頭参照）
7大隊本部（住

所以即謂之爲數行說明之此際

人々を以て其の
心算に於ては
世に於ける
考へるべき事
不問して之を
自問する事

新折に依るに、其の銀行税局、海關、
船舶、及び差押、現金、有價証券等、係留
手続、年三、牧山、口、單、安國、爲必要、之、手、司、各、部
、府、了、右、手、實行、中、手、之、過、手、又、手、答、へ、手、

本署
九月廿一日

常原

岸垣總督

蔣公使昨日刻仁川ヨリ歸來

午後十一時頃再上脚同ニカカリ云レト懇請ニ来リ

依リ無下ニ斷ルヲ知何カト存シ念見セリ其金張要

本日午餐ノ節盡下ヨリ台後事件ヲ扱ナ

如左下上トノ所既ニ固テ安心トナ

仁川ノ所至極ノ一ノ所ノ見

其國ノ事ハ

或ハ

其ノ下ニ劣感顔ニテ述ハルニ依リテ

姓ノ滿鉄沿線及居留地ノ近クニ居ル軍隊ハ警

戒ノ武装解除力多少行ハレタコトニ關テ子居ルカ

何カ斯様ノ際ニ彼我軍隊ノ近ク對立スルコトハ大

事ヲ起ス虞アリカラ事件勃發ニ伴ヒ終極點

大ニ防止交通ノ安全保障、居留民ノ保護等

正々對峙ナリト処置ニ出テタルモノト相俦スル

後子ニテ必要以上ノ警備ヲ行ハルニ依リテ

其ノ下ニ劣感顔ニテ述ハルニ依リテ

其ノ下ニ劣感顔ニテ述ハルニ依リテ

二條ハテ居ル有様ナリ其他所候ハ

岸ノ關係向ハリ自分ヨリ夫々事態ヲ紛糾セ

メサレ縣昨夜指示シ置キシ位ニテ先刻王國境

方面ノ般ニ半聽無テ一報ヲ得タル所ナリ又中

央政府ヨリモ事件ヲ拡大セシメサレ縣既ニ夫々

指示ヲ蒙セラレテリ昨日没前ニ得タル新南電

報ニ依リハ長春ニアル日本軍隊ノ優勢ナル中國

軍隊ニ包圍セラルトノ報アリ此方面大ニ紛糾

向ハテ紛糾ノ態ニシテハソノアルモノハ判斷シ

能ハク奉天附近ニ斯様

事件起リシトハ如何ナル日本政府ノ意向ニ依リテ

モノナリヤ自分ノ今後ノ参考ニモ致シタキ故ニ義ハルヲ

得サレカト申出テシメ依リ政府ノ意向ノ所辺ニ存

スルキハ義和セヌキトモ事件ハ突發的ノモノニテ

即チ貴國軍隊ノ一部ヲ鉄道破壊ヲ企テ之ヲ阻止

セシトスル我守備隊ノ一部トノ間ニ事端ヲ起シテ

力難ク駐シテテ大事ニ至リシモノニテ予左然

竟思等トハ文法無キモノト想像シテ居ル旨也

ソノレニ使テ述ベテ中國ノ當下尚統一ニテ

外 陸軍ニ常ニ送テ後方ニ駐ルモノアリ

統一失敗して中國の共產化を恐るる者

國に於ては豫解義ありて暫く大目に見て貴國と云ふ

一二付ては助力ヲ仰カネハナラヌト支那人常用ノ口吻

ヲ洩セシニ依リ余ハ統一途上ニアル貴國ト云フ對内

的ノ關係カラ時ニ本心ニ及ビタル言動ヲ外ニ對シ執ラ

ルルハ已ムヲ得ヤル場合ノアルコトハ御察シ之ヲ慮ル

乍然締盟國ニアル以上内政上ノ都合ハ如何アリ

トモ條約上ノ規定ニテ義務ニ屬スルハ之ヲ行フ

國家トシテ國際道義上之ヲ遵奉スルハ其義務

上ニ在ル此實ハ貴下モ良ク御存ス

不然ルハキザル又統一助力云云ニ付テモ進玉ニ於テ
自分ノ關係ニテハ夕範圍大テモ軍ヲ教官ヤ兵衛
彈藥ヲ求メニ應ジテ供給シ居リタム筈ナリ其辺
特ニ御義知ノ下ト存スト述ヘシニ彼ハ感激ノ意ヲ
表シ尚附加シテ自分ハ元々軍人ナアルカラ外長辭
令ヲ懸引ハ知ラヌ唯誠意ヲ以テ中日間ノ親善
ニ努ムル積リテアルト述ヘ居タリ
余ハ別ニ此ノ點ヲ試メ以テ確カリ遣リ給ヘ然レハ
金庫ヲ鑑スルニテ一日ノ人心ヲ感動セシムル何ハ難
ナリトテ下ニテ其年分ノ彼ハ時勢中興奮ニ志スル

6

上海
本省

九月二十日
九月二十日
九月二十日

幣原

重光公使

才九九三号

滿洲各地ヨリ、情報ニ依リ、日軍ノ行動ハ頗

ル広汎ニシテ滿鉄沿線ノ要地及沿口ニ於テハ視察

ヲモ差抑フル意嚮ノ如シ、右ノ如キハ非常ノ決心及

準備ヲ要スル決然ナルカ政府ハ奉天宛責電ヲ九

九号ニ依リ奉天事件ヲ成ル可ク縮少セラルルヲ意

圖ト兼知ル處、右陸軍ノ行動ハ政府ニ於テハ

輕重ノ差認ヒラレ居ル、次才ナリヤ又今後

即意嚮本使內密，心得返即回電ヲ請フ。

6

廣東
本省

九月二十日
收

幣原

須磨總領事代理

才四二八号

本官宛支宛電報

才八九号

番地合才八三三二號二

才事件、直接我方居留民、累才及市、懸念了ん

切補方、局、之、所甚大、

移、之、十、之、AP、在、方、レ、中、

其、之、

東省ニ起因スル毛東三省關係、最近事實、相續
ニ毛鑑ミ、今次ノ小衝突、或ハ意外ノ波及スルヤ
モ付テハ、旁午國政府ニ於テ、極力事件ノ擴大化
ヲ防止スルコトニ努力シ居ルニ付テハ、當方面ニ於テモ
力ヲ用ヒ、毛排日等ノ不祥事件ヲ惹起セシメサル
様注意致シタキ旨申入レタルニ對シ、江ハ、當國
民政府ノ勢力範圍ニ關スル限り責任ヲ以テ持ツ
的輕率言動ヲ戒ミ、民衆ヲシテ益々日本ヲ正解
スルハ、極力力ヲ用ヒ、毛ニ付安心ヤリタキ旨回答ス

如ク其抱負ヲ申述スル

一、余等國民黨、同志ハ孫總理、外交政策ハ實ニ東
亞、大局ヲ保全スル根本方針ナリト存シ日華兩
國親善ヲ爲シ、目前、小利益ヲ犧牲ニ供シ、大
ニ就テ決心ヲ有ス、

然ルニ國民黨以外ノ方子中ニ、往々眼前ノ利
益ニ、之ヲ拘泥シ大局ノ利害ヲ認識シ得サル所

小利口ナル輩少カラシムカ故ニ余等ハ之等ノ輩ニ對

シテ、其抱負ハ大局ヲ見テ日華兩國ハ飽迄

ニ、其抱負ハ大局ヲ見テ日華兩國ハ飽迄

文輝ヨリ代表ヲ所シ當政府ト日牛トノ關係ヲ詰問
シ余等ヲ目シテ賣國奴ニ非ラスヤト極言セラル
力余等ハ二日間ニ亘リ懇篤ニ日華兩國ノ根本
義ヲ説明シ聞カセタル結果同代表ハ翻然納得シ
爾來悉ク余等ノ主張ニ贊同スルニ至リ

二折ニ國民黨同志力日華兩國提携ノ必要ヲ最モ痛
切ニ感得セラル大正十二年大震災ノ報ニ接シタル
時ニシテ心中カノ志ハ悉ク悔モ自國ノ滅亡ニ遭
過セルカ如ク悲涙ヲ下シテ痛嘆セラル

以上

十

三

七

四

八

萬難ヲ排シテモ結ハサルハカニサル因縁ナルニ想
到シ南來日華兩國ハ不可有ノモノト確信セリ
蓋シ日本ハ中國ナリト斷ニ存在シ能ハサルト同時
中國モ亦日本無クニハ存立シ得ル者ニ日本ヲ政
洲戦争以前ノ独逸ト假定セシカ中國ハ終ニ東
大和ニシテ兩國ノ生命ハ同一軌道ニ在リ故ニ將來
萬一日本戦争事起ルモ之ヲ金等ハ全力ヲ盡シテ
日本ヲ援助シ復古共ニ慘敗スルトモ之ヲ甘受ス
決心ヲ著ス

現ニ日本ハ中國以外ニ前途ニ有ル

利益、爲以上、大義ヲ忘却之甚ニヤ、日本ニ對シ

抗スルコトヲ愛國ト考ヘ居ルモノ少カラサルハ遺憾

トスル処ナリ、算算ハ一ノ算ノ年合テ说得ニ死ニ至リ

此迄兩國親善ノ爲ナニ努カスル積ナリ、從テ十

月十日ノ四大國ニハ豫定ノ通牒文ノ大亞細亞主義ニ

基テ外交方針ヲ決定スル方針ニテ準備ヲ進メ

居ル一方、今後若シ時局ハ急轉直下シテ和平解決

不能ニ至ル場合ナリトスルモ此方針ニ基テ一日本ハ

國ノ利益ヲ放棄セシムル事ナク、益々兩國ノ親善ヲ確保スル

方針ニ固シキ事ナリ

吉村迄占領管理云々付大々

方軍ノ参謀ヨリ鐵道部ニ命令アリ不取敢出先ニ

手廻ト上本職ニ報告セム次才ナルカ支那鐵道ノ管理

ノ如キ重大政治問題ニ付テ本社只負テ派遣スル

場合ニ政府カ正式命令又ハ軍部上ノ必要ニ

基テ三條ノ少クモ本職ニ直接軍司令受テ

照会アルハ本館合テハ思考スル本任ハ朝鮮軍

滿中此等沙汰止トリル旨報告ニ付ハ奉天

鐵道ノ占領管理件

占領管理件

只今迄ノ情報ニ依リハ軍ハ長春ニ主力ヲ進メ漸次北
進ノ忙勢ニアリトノエトナリ今報據後社外支那諸
鐵道東支鐵道ノ管理占領並ニ今日迄ノ支那要地
ノ軍事占領ノ法的性質ニ付豫メ政府ノ即方針
御示ヲ俟テ置クニ於テハ緊急ノ場合軍ノ急務
ニ応最善ノ措置ヲ執リ得ハトト思考セラル
其結果總ナリ期スル所茲ニ御指示ヲ仰ク

6

滿鉄樞内
本省

九月二十一日
午後

幣原

内田總裁

才二号

木村理平帰連内報セル如ニヨレハ軍ノ奉天占領前夜

ヨリ總領事ハ職務施行上頗ル甚境ニ立ケ居ルモノ

如ク例ハハ支那側官憲ヨリ絶對抵抗ヲ為ササル様

言明セラル付我軍ノ砲撃中止方交渉アリシニ付軍ニ

其意ヲ通シタルモ願ミラレサルノミナラス支那官憲

要人ハ敵人ナルヲ以テ帝國政社外交官力之下交渉

スルコトハ差控ヘ然ルハ止ト抑制セラル支那側トノ

接觸を避ける居る由ナリ而シテ事業回能吉長諸般
道ノ占領管理、如キ重大問題ニ政社代表タル
岡總領事ニ於テ何事承認スル處ナリ着々計畫
セラル我共先社員ニ命令セラル居ル実情ナリ其
他奉天城及商場地ノ軍政施行ニ總領事ニ何事
協議ナシニ軍事行動ノ一部トシテ行ハレ居ル由
ニテ總領事ニ於テ今回ノ軍事行動ニ關シ的確
ナル帝國政府ノ方針ヲ以テ訓令ニ受テ奉天占
領ノ法的根據支那鐵道ノ占領管理ノ法的根據
ニ付疑念ナク要虎カラ懐ナク、扶植ニ當ル

人傳之妻スルヨリ外年ノ付ナ様ナキモノ

天領ヲ因反在留外人ニ於テモ前記ノ諸事ニ付既

ニ疑念ヲ懷キ太平洋會議弔席ノ米國人ヲ

「カー」ト「イルド」ニ氏一員下奉天城內ニ在リ如

キハ支那人ヲ激怒シテ「飽迄無抵抗主義」ヲ

日本ノ暴舉ヲ甘受セヨ最後ノ勝利ハ支那ニ「テ」

口ツバクト「主動者米國ノ國權ヲ喚起シ日本

ヲ抑フ」ヲ得「レ」一男ノ意見ヲ吐露シ居ル

必スヤ支那ノ國威隆興太平洋會議ニ對シ

支那ニ對シ我軍ノ奉天並同止

14

己未年九月二十一日

林毓鈞

卷之七

南東軍司令部、当地市政、園之、本二十日中、別電、

通リ布告ヲ出スヨトテリ屋々処本日午前軍司

郡より本官、来訪す。来々之外、中より

趙子久之二
三空參珠長
二宮雲石

今官の二名見上事実上日本側ニ於テ市政ヲ存ク
リトテ同意ヲ得ルニ至ラズ依テ本官ハ陸軍司
點軍人ヲ市長トスル點ニ付其非ヲ指摘シ懇談シテ
ルニ軍司令官ハ大佐本官ノ説ニ賛同スルニ既ニ命
令済ミタルニ付直ニ改正シ兼テ右ノ軍ニ對シテ
一ツトニ過キハ結局支那人ニ引渡ス所ニナリトテ
一ツトニ過キハ結局支那人ニ引渡ス所ニナリトテ

6

幣原

才七七号

一、日本軍司令部

藤天雄附送

現送

呈

官民、幸福

藤天雄附送

一九四九年九月二十日

軍、指導

藤天雄附送

一九四九年九月二十日

時市政、施行

一、奉天市政

奉天市政、施行

入滿鉄附屬

藤天雄附送

一九四九年九月二十日

市政、施行

藤天雄附送

一九四九年九月二十日

西門大街三設

一、市政業務ノ範圍ハ特ニ定ムル所ノ外奉天市ノ内

一切ノ倉庫等ハ之ノ下ニ

一、市政ノ發負左ノ如シ

一、其他細部ニ關シテハ別ニ指示ス

市長 土肥原大佐

副市長 宮村健一

總務部長 渡辺悦

財政部長 佐々木

工務部長 佐々木

衛生課長

守田福松

工務課長

技術課長

事業課長

吉川康

以上外別ニ市公所ニ依リ日文兩國人ヲ上子之團與

セシム

6

安東
本省

九月廿一日
午

幣原

米沢領事

才一云二号

往電牙一二七号二関止

朝鮮軍の時滿洲移駐ヲ見合セ大部分移義州

逗留中ナリニ越本朝十時半頃平壤運輸事務所

ヨリ安東取長ニ達シタル通報ニ依リ本年二十日中

ニ移駐ヲ開始スルヲ取ニテハ既ニ列車ヲ準備成リ

居ルヲ知リ

安軍
未省

九月廿一日
廿二日

幣庫

米沢銀了

升一三五号

往屋升一三四号二周之

朝鮮軍 午後一時 龍山步兵十八聯隊砲兵

二大隊及憲兵一部 一時半 平壤步兵十七聯隊

隊一連 龍山砲兵連二十八聯隊一個 以同一工

兵連 平壤步兵連 衛兵連 三時 龍山砲兵

連 及四時 龍山砲兵連 及四時 龍山砲兵連

列車三子 將校計三子

計四十七号四十二三砲四四ノ輸送ヲ下ニ命ジリ
茲ヲ告ガリ

尚ホ作輸送付テハ滿鉄本社ヨリ何等ノ指令ナカリシ

取長ニ於テ一應極絶シタルニ最初ノ列車ニ乗込ノ旅団

長ヨリ軍ノ必要ニ依リ運行スルキ旨ノ命令ヲ受

シ取長之ニ從ヒタルモノナリ

内閣陸甲外一三三

昭和六年九月廿一日

外務省官 永井松三殿

内閣書記官長川崎幸吉

本日閣内蔵三張子別紙一通、決定相成候、余宛存

此段及通牒候

九月十八日夜、其飛鳥、満鉄線破ニ因リ生起シタル

急事、事件、之ヲ事重ト看做ス

奉天
本省

九月二十二日

常原

林經

才七二号

朝鮮ヨリ来着七九步兵才七十七联隊ノ内二个中隊

ハ市民所ノ内又步兵才七十八联隊ノ内一個中隊

ハ市民所ノ内又步兵才七十九联隊ノ内一個中隊

ハ市民所ノ内又步兵才八十联隊ノ内一個中隊

本署

九月廿一日
廿三日

幣局

林總領了

分七一六号

滿鉄任堂木村西理事、内板ニ依リ廿一日軍司令官了

任堂理事ニ對シ四池鉄路ニ依リ軍隊輸送ノ場合ニ

鉄路了之ヲ運行ヲ引受ケ實ニタシトノ申込アリ

任堂理事ハ廿一日朝俾奉、木村理事ト依テ上

任堂理事ト依テ了シ、四池鉄路會

任堂理事ト依テ了シ、四池鉄路會

任堂理事ト依テ了シ、四池鉄路會

村に明確ナル所を先セラルル限リ之を以て引
クルヲ得タル旨ヲ回差シタル處軍司令官ニ於テモ右
所を離ルル迄ノ決心ハナカリシモノノ如ク結局何四脱
鉄路局長ヲ強制シ廿一日ノ鞍山守備隊及龍山野砲
兵ノ野砲兵出動トナリタル次第ナリト云フ
右外部ニ絶対極秘ニ即取計ヒテ請フ

6

奉天
省

九月

十三日
前

幣原

林銑
銓

才七十四号

二十一日午後五時頃軍司令官ヨリ滿鉄總裁宛大要

左ノ通指令下リタリ

滿鉄總裁支那鐵道利用方ニ関シ準備セラルルニ對シテ

南滿四洮線管理ノ必要ナルハキニ付此點ヲモテ

レ準備スルヲ要ス

6

九月二十日
左
右

幣系

堀本長安

才一〇号

當廳警察情報即参考迄左一通

廿日夜花谷少佐森島銀平ヲ訪由シテ右ノ事件ニ就テ

當夜録下リテ支所側ハ絶對無抵抗ト稱スル事以テ

警署止方申出テ了リタルニ據ル者ニ打尾シタル所

ヲ指シテ止方申出テ了リタルニ據ル者ニ打尾シタル所

ヲ指シテ止方申出テ了リタルニ據ル者ニ打尾シタル所

ヲ指シテ止方申出テ了リタルニ據ル者ニ打尾シタル所

ル態云ニ出テクリト云フ 右に現在軍部一結合
側ノ空氣ニミテ金々聯絡協調シ得サルヤニ着
着取タル

6

女広惠

九月廿二日
左

幣原

須磨總領事代理

才四三二号

廿日陳友仁、お入ニ依リ面会シタルニ今次滿洲事件

ニ関シ由下ニ傳達アリタルトナリ時差ニ由リ本通事入ル

ニ廿日諸新聞ガ有ニ今回以事件ヲ傳フルヤ曰ハ朝

憲廿日ニ由リニ回國形研究会ヲ開催シタル事

本所ニ於テ注精備ニナリ十九日貴客より、中へ

本所へ電話にて、お入ニ依リ、

七デリ、何、口、南、満、洲、事、件、

千載ケケ日中軍ノ占領スル知トナリテ決テモハ

此方面ニ於ケル國民ト云モ國家的ノ屈辱トシテ相當

憤慨スバク旁觀團等ニハ何レ事態ノ推移ヲ見テ

日中政府ニ嚴重抗議スベキ旨ヲ發表シテ作裁

ヲ懸テ一方貴賓ト云合ノ約ヲナサル要人ヲシテ

變遷ヘシムトナリタキ証ナルガ在電亦四三三三

貴賓等ノ右ハ決シテ日中側ニ對スルコトナリテ

日中政府ノ見解ヲ判然トシテ示スベキモノナリ

ト云フモノナリテ日中政府ノ見解ヲ判然トシテ

示スベキモノナリテ日中政府ノ見解ヲ判然トシテ

系、

二、本官、茲、隔、隔、
滿洲事件、經緯、

總、領、事、官、之、在、支、公、使、署、國、下、宛、

後、亦、九、九、一、等、之、趣、旨、之、依、
行、之、様、

九、地、隔、自、分、之、先、般、送、日、
隔、封、建、時、代、的、

之、上、是、以、其、年、陸、軍、が、差、
滿、洲、局、之、所、子、

之、上、是、以、其、年、陸、軍、が、差、
滿、洲、局、之、所、子、

之、上、是、以、其、年、陸、軍、が、差、
滿、洲、局、之、所、子、

之、上、是、以、其、年、陸、軍、が、差、
滿、洲、局、之、所、子、

之、上、是、以、其、年、陸、軍、が、差、
滿、洲、局、之、所、子、

中ナル其力ハ良ク諒察ニ居リタリ矣先悉然今其

容易ナラサル事態ヲ發生目シタル以テ十分準備

ノ説明ニ依リ日如ク其権益ヲ保障スル爲正當防衛

ノ手段ヲ執リツツアルカ如ク從テ在京中幣原

大臣ヨリ得タル印象ト何異異ナラザル政策ヲ

實行セントセラルルガ如キモ滿洲重要都市上は領

ト言フガ如ク因ハ敷事態既ニ發生シ爲ニ陸軍

機トモ其ハ計画的ナリトシカ見ハサル中常ニ其ニ

ハリテ下ルニ其ハ準備大臣ニ於テ何ナカ其

ハリテ下ルニ其ハ準備大臣ニ於テ何ナカ其

力を盡し強かりて以て強學良ノ利用を爲す
ルトハ全然無キ異ニスハク又一方東之者ニ於テハ種
在 京中 數次幣原大臣ニ申入レタル根本精神ニ基
キ一切ノ措置ニ出ルハキ所存ナレハ自然當政府ハ
今次軍事事件ノ解決方ニハ非常ナル関心ヲ有スル
事ナリ

幣原大臣ニ於テハ其近代の經驗ヲ以テ清國内政ニ

對シテ多量ノ解決ヲ與ヘラレハスルハ其意ニ合フ

點ニ在リ

其意ニ合フ

ル況合ナルヲ差シ如事俾解決ノ為南滿ノ地事自
持力破壊セラルルカ少クトモ現在ノ為政者ニ或ル
種ノ要改ヲ見ルコトアル場合ニ於テハ事甚ク重要
ニシテ自然當政府力數回ニ亘リ日本政府ニ申入
タル南滿ニ關スル對日政策ニ相當影響ヲ與スル
要自合ニ於テハ特ニ豫メ此間ノ消息ヲ明カニシ以
テ第四全會議ニ提出スルニ對シ外交政策ノ方針
ニ對シテハ一旦之ヲ考慮スルノ要アル地ナリトハ
大抵ニ豫メ示シ此點ハ極力考慮成リ大ニ之ニ對シ
テハ

見合タルノ早目ニ對面相成タル

6

奉天
本省

九月二十三日
二十四日

錦原

林總領了

廿七、六号

往電牙六八号二奥之

有百名、自衛団八十二日午後二至リ突然食糧缺乏

給料不法并リ理由ナシ同盟罷業ヲナシ自衛警

察局長李毅（瀋陽市長）ニ病氣辭職シタルヲ

以テ我黨兵當局ニ於テハ早速瀋陽市商會に負責馬

形異テ後任局長ニ任命シ食糧ハ即時糧秣廠ヲ設

收シテ供給スル外給料ハ追テ適當ノ方法ヲ講ジテ

結方備 35 3 際アル 条件 3 以 3 新 2 自 衛 団 巡 警 7 募
集 セシ ナ ヲ 、 ア ル 毛 只 今 迄 1 処 応 募 得 者 十 七 、

6.

奉天
省

九月廿三日
左

幣原

林
總領事

才七三七号

今回、事件に關し政府の方針は事態より出来る大々抗
 大セシメス不必要ナル進出等ヲ嚴ニ避クルニアル云々ハ
 貴電第一九九号及才二〇〇号ニ依リ業知レ奉官ハ右
 ノ趣旨ヲ以テ出来る大々軍部ト折衝シ政府方針ノ
 貫徹ニ努力シツ、アルモ其故一軍ノ行動ハ果見テ
 以テスルハ政府の方針ヲ裏切ルモノノ如ク思召セ
 下レ特ニ滿鐵沿線以外ノ地ニ對スル軍ヲ行動ト見テ

已何レモ本官ニ何等通知ヲ爲サスレテ実行セラル軍司
令官トノ數次ノ會見ニ於テ本官カ諸般ノ件ニ關シ政府
方針ニ從ヒ懇切ナル注意ヲ與ハタル際ハ體裁ヨリ忘答
シ乍ラ事實ニ於テ着々軍事行動ヲ擴大シ居リ特
ニ兩日來司令部ハ當館ニ對シ出來ル大體情報ヲ傳
フルヲ避ケニトスルカ如キ態勢ヲ示シ來レリ本官
ハ館員ニ對シ政府ノ根本方針ニ關スルモノハ之ヲ別トシ
本館ノ軍關係ノ行動例ニ奉天省城ノ治安維持等
ハ市政回復ノ如キ件ニ關シテハ深意ヲ以テ之ヲ援
助スル様訓令ニ且努力セシメ居ル次第ナル司令部

係、当館、行動ニ対シ鮮カラス猜疑ノ眼ヲ以テ見ツ、

アルカ如ク之カ爲不幸ニシテ此ノ困難時ニ際シ当地軍部

トノ關係ハ之ヲ円満ナラシムル事題ル困難ナル事情ニ在リ、

難ヲ思フニ現在ノ事態ハ累次電報ノ如ク我國ニ執

リテ最極大ノ重大性ヲ帶ヒ来リ然モ尚日増ニ悪

化シツ、アリ之ヲ防クカ爲リ政府ニ於テ萬遺漏ナ

脚處置ヲ執ラルルト同時ニ出先タル当館ニ於テモ

全力ヲ舉ゲテ事態ノ悪化ヲ阻止スルニ努メツ、アル

モ不幸ニシテ本官ノ微力ヲ以テ之ノ如何トモス

テラサレ状態トナリ得ニ唯傍觀ノ已ムナキニ至リ

ト、本官ハ唯此際中央ニ在リ政府力軍部ヲ充分
ニ御成飭ノ上彼等ノ行動ヲ速ニ軌道ノ上ニ復
歸セシムラレシ事ヲ切望シ予已マ不^レ部外總討極秘ヲ
希理ス

6.

上海
本省

九月二十三日
二十四日前

幣原

重光公使

外
一〇二二号

一、今次軍部ノ行動ハ所謂統帥權ノ觀念ニ基キ

政府ヲ重視セルモノノ如ク折角築キ上げ来レル

對外的努力ヲ一朝ニテ破壊セラルルノ感アリ國家

ノ悔ヲ案シテ悲痛ノ感ヲ禁シ難シ

此上ハ日王連ニ軍部ノ独断ヲ禁止シ國家ノ意思ヲ

シテ政府ノ途ニ出ツルニトシ軍部方面ノ無責任ニ

シテ不利ナル宣傳ヲ差止テ禍端ヲ鮮明ニシテ政府

一指導ヲ確立セラルニコトヲ切望ニ耐ヘテ、

二民間側ノ事態ノ重大ヲ知ルト共ニ例ニ依リテ軍事的

ニ無抵抗主義ヲ以テ押進セト共ニ軍ヲ行動ニ非

サル凡ソル他ノ方法ヲ以テ對抗手段ニ移レリ尙部

政府ノ一致ヲ指導ハ勿論從來訓練ヲ経居ル排日

ノ總テノ精肉ハ活動ヲ始メ、アリ經濟絶交ノ如

キハ未タシモ朝鮮事件ノ際ニ動搖セサリシ全

國學生ノ活動ハ最終影響多ク反日感情ノ悪化ハ

所謂千ヶ倉肉題ノ影響ヨリモ甚シク今後益々

悪化スルモノト認メラル

今日、状況ヲ以テハ何時滿洲以外、地ニ於テ不祥事ノ
勃發ヲ見ケルヲ測ラレサル狀況ナリ（此點ニツイテハ我海
軍ニ於テ特ニ自重スル様政府ニ於テ充分注意アラシ
メテ請フ）若シ萬一我軍北滿ニ進出スルニ到ラシカ直
ニ露國ト、衝突ヲ豫想セシメ事態ハ益々重大化スル
ニ（右ハ軍部ノ計畫カトモ認メラル）

三、民國政府ハ急遽内争ヲ片附ケ（広東側トハ妥協
ハ急ニ真面目トナリ愈實現ノ模様ナリ）統一ニシテ力
ヲ以テ表シ以テ表ヲ制スル、傳統的政策ヲ以テ
事件ヲ先シ國際聯盟（最近宋子文ノ聯絡ニ依リ其

關係密接トナリタリシ及不裁條約ノ筋ヲ辿リテ其國
ニ繼リ内外宣傳ノ力ト相俟テ日本軍ノ撤退ヲ強
請スルノ方策ニ出ワルコト山東還付ノ場合ト同様
ナルヘシ如何ナル場合ニ於テモ今後滿洲問題ニ關シ
テ我國ト適當ノ取極ヲナシ又其目的ノ爲ニ交
渉ニ入リ得ル當局者ハ民國ニ出現セザサルヘシ從テ
今國ノ事件ハ日民兩國ヲ以テ事實國交斷絶ノ
狀態ノ下ニ永ク放任セリシ民國側ノ策動ニ依リ世
界ノ輿論ニ曝サレモ一ナルヲ覺悟セサルハ力ナシ
四 現在ニ於テ、在支外國人等中三者、論調ハ日本ニ必ス

毛不利ナラフ恐ラク世界ノ輿論モ同様ナルヘシ右ノ偏ニ従来
ノ我外交方針及甚努力ノ賜物ナリ然レ時ヲ經ルニ鮮ニ
ツ子右ハ必スモ樂觀ヲ持サス之ニ對スル方策トシテ此
際技巧ヲ用フルノ策中キニ付我軍ヲ行動ハ之ヲ我力
鐵道沿線ニ局限スルニ艱努ムルト共ニ滿洲問題ニ關スル
我方ノ斷平ナル決意ヲ表明スルニ在リト信ス即チ
滿洲ニ於ケル適法及歴史的地位ヲ擁護スルハ日本ノ死活
問題ニシテ若シ右ニ付國際聯盟等他國ノ了解ヲ得ズ
ニ聯盟脱退ヲモ辭セサル態度ヲ持スルコト適當ナルヘシ
右ノ決意ヲ示スコトニ依リテ中ニ者ノ介ヲモ辭シ得ヘク

且民國政府ヲレテ或ハ態度ヲ變シテ我方ト妥協的
交渉ニ入ルノ已ムナキニ至ラシムルヤ已知レズ今日ノ場合
躊躇スルノ時機ニ非サルヲ信ス、

6.

奉天
本省

九月廿五日
廿六日前

幣原

林
總領了

才七十九号

廿五日軍司令官、本官ニ対シ長春以北ニハ迄萬已リ

得サレ場合ノ外ハ出兵相成リ難シトノ指令ナリニ処廿四

日午後參謀總長ヨリ改メテ哈爾濱方面ノ出兵ハ如

何ナル事情アルトモ之ヲ許ササル旨嚴重命令ヲ發シ

タレ旨ハ迄ニタリ

6.

天津
本省

九月二十五日
二十六日前

幣原

田尻總領事代理

中三四七号

大公报胡霖(親日家)二十五日銀貨ヲ来訪シ日本側ニ於
 于既ニ今場中變ノ擴大ヲ防止スル一方秩序回復ニ專
 念セラレ居ル様様ノ処之ニ奉天全省ニ亘リ制令ニ俾
 ハキ中央機關ヲ樹立スルノ方法ヲ講スル事急務ト
 認ム所ニテ學良ノ事業ニ至ルル以上帰奉ノ望ナキヲ
 豫想シ中央政府ニ萬分ヲ委ネントスル傾向ナル中
 察セラルル処若シ本事件ノ交渉ヲ中央ニ移ス場合ニ

反蔣各派、各系分子を一致して反日氣風を醸成し、努
メ日本將來の爲に毫毛利益無き結果ヲ招ク虞アル
ニ付日本当局ハ速ニ新旧何上リ向ハス（尤モ學良ノ命令
無キ限リ作組ハ表面ニ立タサルハキモ）奉天派ヲシテ東
北ノ治安ヲ維持セシメ之ヲ相争ハシ地方的ニ本事業
ノ解決ヲ急ギ以テ無辜ナル東北民衆ノ安全ヲ
計ル事所要ト推存ス日本ニ強テ右方針ニヨリ善
処セラルル場合北平若ハ南京トノ接洽ニ付テハ自方トシ
テ先出未得ル限リノ努力ヲ解セスト語リタム趣ナリ

6.

北平
本省

九月廿五日
廿六日
前

幣原

矢野参事官

升四五号

張學良ハ廿三日附電報ヲ以テ東北边防司令長官公署
及遼寧省政府ニ職權ヲ行使不可能トナルニ付
錦州ニ移駐スルヲトセル旨各方面ニ通告セリ

6.

哈爾濱
本

九月二十五日
前

幣系

大橋總領了

オノオ号

貴重牙の五号ニ関シ

当地^ニ出兵セズ事態切迫ノ場合ニハ居留民長長春

方面ニ引揚クルト云フカ如キコトハ如何ニモ蘇聯ニ遠慮

シタルカ如キ感觸ヲ与ヘ蘇聯ノ北滿ニ於ケル立場ヲ強

メ支那側ヲ^レ益々我方ヲ輕視セシムルノミナラス目

下滿鉄ニ對シテ多岐的態度ヲ執リ居ル身鉄及東

支兩当事者ノ態スヲ硬化セシメ我方ノ北滿發展上

里大ナル懸影郷者ヲ及ス處アリ且当地支那軍憲ニ
於テモ右張學良ヲ通シ兼知シ居ル模様ニ付前記
御決意ノ趣旨ヲ哈爾賓其ノ後ノ治安狀態ニ顧
ミ出兵ハ一時見合ハスコトニ御変更ノ上至急發表
リテ方々ニ於テハ官ノ責任ヲ以テ聯合ヲシテ右ノ
旨通信セシメ置キタリ

○我軍部ト我領事官トノ交渉、

(1) 奉天事件發生直後板垣參謀ト林總領事トノ話
分シ總領事ノ忠告ニ對シテ徹底的ニヤルノ力軍一方
針ナリト答フ。

(2) 奉天、十九日總領事ト軍司令官

協力申合セ、軍司令官ハ海關差抑スヘカラスト

訓令濟、趣答フ(管口ノ海關強收說アリタル爲)

(3) 十九日、軍司令官、總領事ニ「朝鮮ヨリ約一ヶ族

團(飛行隊ヲ含ム)ノ応援隊廿日朝奉天着豫

定ナル旨及ヒ「只今令一処軍トシテハ新民屯ニ

於ケル遠隔ノ鉄橋迄ハ何事カノ措置ヲ為ス必要

アリト考テルモ田中總督ニ對シテハ相尋ハ計

画ヲ爲シ居ラスニ總領ヲヨリ撫順會議ノ報告

十七日夜接平軍司令官ニ書翰ヲ發セルモ尚ニ

合ハサリレハ右令省ニ報告済ム旨軍司令官ニ通ル

(二) 二十日午後赤島領ヲ至宅參謀長ト會談(二客

憲兵隊長、板垣參謀同席)參謀長布告草

案ヲ提示、領事再考ヲ求ム

參謀長「確定議ニシテ司令官決裁済トテ同意

後刻林總領ヲ司令官ト會見、市政ヲ布ク點

軍令市長トスル矣ニ付非ヲ指搦軍司令官左
意見ニ同意ナルモ命令消ナリ改訂し難シ畢ニ

如日肉ノヲヤリ結局支那人ニ引渡ス所存ナリ、

(木) 二十日夜三宅參謀長林總領ヲ訪、撫順會

議ハ川上中隊長ノ性質粗暴ナリニ爲演習計

画ヲ案リ強ク説明シタル爲本事件力軍ノ計

劃的行動ナルカ如ク誤解サレタリ誤解ナキヲ

希望ス林總領事由ナクニ止ム、

(イ) 其際林總領事ヨリ事態不拡大強調ニ定奉

謀長一尤モナルモ哈爾濱吉林方面不穩説ナリ

居留民危害ニ遭フ場合ハ当該領事ノ事一請求等
ニ依リ出兵セサルヲ得サルコトナキヲ保セズ、軍
第一場合ニ処スル途ヲ研究スルコトヲ急ラズ、林總
領事「右ノ政府ノ方針ニ背馳スル居留民ニ危害
及フトキハ出来ル丈ニ避難ノ方法ニ出スル外ナシ」
(ト)廿日「吉林不穩ニ付出兵セル」旨軍司令部ヨリ
通報アリ、

(4)廿日林總領事軍司令部官ト會見司令官ハ朝鮮
飛行隊着奉肯定、朝鮮軍移動至定、

(5)廿日吉林出兵後軍司令部ハ林總領事ニ右ハ吉

林居留民危之犧牲ニシテハ責任問題故午前
三時出勤命令ヲ發セリ林總領下ヲ通シテ
吉林總領下ノ意見ヲ求ムルモナリシモ吉長固
通信杜絶ニ付手續ヲ經テ斷行セリ又吉林ノ
情勢安靜トナリハ小部隊ヲ踐シ他ハ歸還セ
シムヘシ林總領下ハ出兵前ノ上ハ已ムヲ得ス
今回事件ノ跡始末ハ國際的ニ面倒ナル故政社
ノ方針ニ適フ様スヘキ旨忠告

(又)廿五日市政經費ニ關スル廣東軍司令部官ヨリ通知
ニ來ル

(11) 林總領事一事態不拡大、撫省ニテ軍ト折衝セルモ
滿鉄沿線以外、地ニ對スル軍事行動ト虽モ何レモ
總領事ニ通知セズ、実行シテ軍司令官、總領事一
忠告ヲ表面ニ介シ、容レ事實ニ於テ軍事行動ヲ
拡大シ情報ヲ總領事ニ餽側ニ与フルヲ避ケントスル
傾アリ。

(12) 廿四日朝軍司令官ハ林總領事ニ對シ「吉林安靜
トナレル為、部隊ヲ残シ他ハ長春迄引返サス旨敦
化撤去通遼撤去等ヲ終リ哈爾濱ニ留シテ同地總
領事ヨリ二十一日午後七時出兵要請セリト」說アリ

ルハ事實ナリヤト向ヒ林總領事ハ右ノ如キ要

請ナラ軍部ニ確報ヲ齎待タルハレト答フ、

(二) 當日十九日、大石橋守備隊長領下ニ相談ナク

(ハ) 當日及河北占領タラズ餘ニ大隊本部ヲ置ク、

(四) 廿三日田庄台對岸水源地ニ領下ヨリ出兵請求、

(三) 安東二十日、領下ト岡部大尉

(ハ) 領下「軍政實施反對」大尉「銀行、税局押収ハ軍

一為、軍命ニ依ル」

(二) 同日領下「實彈ナキ武裝公安隊ニ返還方

提議同意

(11) 廿二日(？) 領了より銀行事務許可(公金) 陸上

方提議

(12) 新義州未援部隊 (12) 武署返還反対

(四) 二十日遼陽、軍部、武装解除希望ニ反対成功

(五) 長春十九日

(11) 領了支那側、依頼ニ依り旅團長ト平穩

武装解除交渉ニ付議合セルモ実行ハ南嶺

ニ向ニ合ハス

(12) 廿日林總領了 餉糈出兵要望旅團長ニ傳達

(11) 二十日第二師團長ニ対シ其、吉林出發前領

事ヨリ哈爾賓出動及封、領事ノリマクニ
子寛城子駝ノ歩哨撤退

(九、二五、調)

今日迄、我軍、行動ヲ要求約スルニ左ノ如シ

十八日夜、我守備隊虎石台分遣所隊員ト北大營

支那兵ト、肉ニ衝突交戦、北大營包圍

十九日、奉天、旅順、遼東軍司令部、鉄嶺、南原、四

平街、遼陽等ヨリ守備隊主力奉天ニ集中、

奉天城内商埠地等占據

長春、南嶺、寬城子、安東、鳳凰城、營口

河北、本溪湖、瓦房店、支那軍警、武装

解除ヲ行ハリ(長春、公安隊ヲ除ク)

二十日

昌圖、兵營多攻擊、

二十一日

朝鮮軍奉天、入、午後一時十分、新義州、越境、

我軍吉林、入、午前九時半、長春、午後六時、到着、

二十二日

鄭家屯、新民府、入、四平街、鐵路、警務、

團、武裝、解除、

二十三日

敦化、入、但、直、引返、不通、遼、赴、部、

隊、歸、

二十四日

吉林、赴、部、隊、大部、長春、歸、

我軍、今日、占據、居、地、真、(九、二四、)

(一)奉天、吉林、遼東、南嶺、寬城子、營口、河北等、

新民府、鄭家屯、鳳凰城、本溪湖、昌圖、四平街、
房店等ニ付テハ我軍力軍警ノ武装解除後占據
シ居ル中不當ヲ判明セム。

(二) 敦化ヨリハ撤兵セリ、

松本記録

昭和二十五年十月
近族より提供を受く

常子子

抑々
海島
現に

馬場
山崎
村

抑々
山崎

6.

奉天
棒嶺

十月二十二日 夜

幣原外務大臣

林總領事

才一〇七七号

貴電才二七〇号ニ関シ

一、往電才一〇三七号ノ、島本守備隊長ノ説明ハ貴

任ノ地位ニ在ル外國人ニ對スル最初ノ説明ニ

シテ同隊長ハ爆破時刻ハ十八日午後十時ヨリ

十時半迄ノ間ナリト言明シ居リ且當地米國總

總領事ニ於テハ同題ノ午後十時半奉天着ノ

列車ニ搭乗シ居タル外國人ヲ突止メテトシ居

ル模様ヲ予一方関東軍参謀部ニ於テ往電ヲ

一〇三八号當鈹ト打合セ基キ十九日附ヲ以

テ支那兵鐵道爆破直後ニ於ケル我軍隊ノ行

動ノ詳細ナル冊子ノ下ニ之ヲ説明振リテ統一

ニ關係方面ニ送付收ナルニ付今日ニ至リ貴電

ノ如ク説明振リテ要更スルハ面白カラズ当地軍

部ニテモ同様ノ意向ナリ、

二、當軍側ノ説明ニ依リハ列車通行前ナリニ

事ニ付テハ兵卒ノ回聲談ノ外ニ左ノ事實ヲ

リ令更之ヲ否定スルヲ得ズ、

(1) 當時奉天駅員中爆声ヲ聞キタル者アリ同駅員等ハ本件列車ニ事故起リタルモノト思考シ危急措置ヲ講セシムル程ナリ。

(4) 島本守備隊長カ部隊ヲ率ヒ爆破現場ニ赴ク爲奉天駅ニ列車準備ヲ依頼シタルカ右依頼カ奉天駅ニ向題ノ列車到着前ナリニ事ハ駅員中兼知シ居ル者アリ。

三、列車ノ通過可能ナリニ事ハ素人ニハ幾分疑ハルヲ免カレサルヘキモ爆破ハ軌条ノ片側

ノミニシテ而モ軌条ノ接合點ニシテ破損部分モ

短カカリシ爲通行可能ナリシ次ヲニシテ專内家ニ何事不思議ナシ。

6

天澤
本直

十月二十二日
午後

幣原

桑島
總領了

才四二八号

廿一日塘沽入港、天潮丸ニテ大連經由張學良、
荷物四百七十一個到着、此地我運輸部倉
庫ニ一先ツ入庫セラルタリト。

南機高外功五五六一号

昭和六年十月二十三日

拓務次官

南東廳警務局長

外務次官

南東軍軍務課長

南東州在勤海軍武官

外国人、素往動靜其他、時局特報

在奉外國領事團等、鉄道爆破箇所及北大營、
戰跡視察

駐哈米國總領事ハニソン、駐日米國大使鐵二
等書記官サリスバリー、駐奉米國領事ノナ

駐奉獨逸領事ケオルタ、クルホー、在北平英國公
使館附武官スコット、同スリヤリ、並在奉美
米領事館書記生等一行九名、本月十八日午
收三時十五分獨立守備隊二大隊長島本中佐
通訳奉天地方事務所外人係渡亮之助、森
岡、柳井兩領事等、先導三台輕油動車ニ依リ
奉天駅出發支那側、滿鉄線爆破箇所並
北大營外七旅、現状調査ニ向ヒタルカ爆破地點
ニ到ル途中説明者島本中佐ハ輕油動車
ヲ停車シ北大營ニ於テ押收シタル排外書籍

おろす一算一行。示之支那軍当局、兵卒ニ対スル
排外思想ノ注入並支那側学校当局者、児童
ニ対スル排外教育ノ状況并ニ就中説明シタル後
鉄道線路爆破地点ニ到リ、当時ノ状況ヲ詳細
説明シ、徒歩ニテ此大宮ニ到リ、戦闘^情況、日支両
軍ノ死傷者数、砲撃情況等ヲ調査シ、午後六時頃
調査ヲ終ヘ、帰宿シタルカ、調査員一行ノ現場ニ於テ
漬肉ハ相当微ニ入リタルモノアリ
何レモ熱心。島本中佐ノ説明ヲ聴取シ、居タリ因
主ナル漬肉ノ概要ヲ如シト、

(1) 鐵道爆破力午後十時頃トスル午後十時三十分
著奉天列車急行列車ハ転覆、脱線、乃至不通
過之際ニ何等カノ故障起ルハキ筈ナリ了了不十

(美米代表)

(2) 鐵道爆破ハ如何ナル爆藥類ヲ使用セルヤ、

(3) 滿洲事變發生以來常に其他各地ニ於ケル

日支軍ノ衝突事件ヨリ見ルニ何レノ場合ニ

於テモ支那側ヨリ積極的攻勢ニ出サタル

事實ナキ様様ニテ鐵道爆破現場ニ於テモ高

梁畑ニ潜伏セル敵約三四百名カ日支軍ヲ射

撃後日本軍ノ死戦ヲ受ケ北大堂内ニ逃亡セリト

云ハレルカ當時日本軍ハ何等ノ損害一死傷者ヲ

受ケ居ラサルニ無理ニ敵兵ヲ追撃シテ北大堂

ヲ占領シ事件ヲ拡大スルノ必要ナカリシモノノ如

ク思料サレルカ如何一駐日米國書記官サリスベリ

(4) 日支兩軍ノ死傷者數如何

(5) 日支兩國軍ノ死傷者數ニ相當大ナル南アルカ

何ナル理由ナリヤ

支那側ハ主トシテ守勢ヲ採リタルニ拘ラス日本軍

ハ常に積極的攻勢ヲ出ラタル結果ニ非スヤ

哈米國總領事ハニソニ

(6) 日本軍ハ支那軍ニ対シ降服ヲ懇請セリトナキヤ

(7) 支七旅ハ兵力強ニト全部焼失サレ居ル原因如何

(8) 破撃ハ何人ノ依頼ニ依リ行ハレタルモノナリヤ

英國武官

(9) 砲撃ヲ開始セシメ何時ナリシヤ英國武官

(10) 砲撃ニ依リ日本軍ハ損害ヲ蒙リサリシヤ

英國武官

(11) 北大營ハ何時占領セシヤ英國武官

(12) 北大營ハ我軍ニ於テハ日本軍ノ積極的攻勢

ニ依リ支那軍ハ余リ抵抗ヲ試ミ其形勢ヲ跡ナキ
モノノ如ク思料セラルルカ如何

ニ無在奉時局關係外人記者並各國領事館ノ
動靜

(1) 在奉外人記者

目下本月十九日現在一奉天ニ滞在シ時局ニ
蒐集中ノ外國人記者ハ左記ノ通ニシテ大和
ホタル、又ハケイニシテホタルニ滞在シ南東
軍司令部発表ノモノノ外各國領事館及
外國商館ニ出入シ時局ニテ一ス蒐集中ニ在リ

居レルカ其通信概要左ノ如シ

イ、上海駐在、米國人、バウエル

右者、シカゴ、トリニ、反ロンドン、デイリーニ

ス紙ニ通信シ毎日、紐育及上海宛打電

シ、ツアルカ本名ハ、既ニ蔣介石、張學良等

ニ買収セラレ、辛辣ナル調査、及逆宣傳ヲ

ナレ、日支兩國ノ國際關係ヲ惡化セシムト

共ニ世界ノ平和ヲ攪亂ス、ハク在國ニツ、

アルモノ、如ク、其通信ハ極トテ排日的

ニシテ、且事實ニ相違セル、莫不抄上ヲ以テ

当廳遞信局ニ於テ適宜削除シ居ル模様
ナリ、

口、北平駐在、米國人ハニター

本名ハ米國集合通信社及倫敦イニターナ

レヨナルノ通信員ナリト稱シ居ルモ常ニ

倫敦宛打電シツ、アリ其ノ通信ハ極メテ

抑目的ニシテ、且逆宣傳的ナルヲ以テ適宜

非遞信局ニ於テ削除セラル居レリ、

ハ北平駐在、タツム遞信員 スレバツク

右者日本軍部発表ニユースノ外一般情報ヲ

葛集ニ毎日二回モス。宛打電ニ居ルカ時々掛

目的ノ通信ナリ。適宜削除セウレ居ルリ。

二、北平駐在　デイリリー、テレグラフ通信員

英人　ゴーマン

右者概シテ親日的通信多キモ時折リ日軍

敏捷勇敢ヲ賞揚強調セムカ爲反ツテ我軍

ニ不利ナル通信ヲナスコトアリ其ノ都度適宜

削除セウレ居ルリ。

ホ、元哈爾濱ニラルト社長

英人　レノックス、レムボン

在奉ソ聯邦欲予鐵ノ爲時局ニユース葛集ニ努

メツツアル様ナルカ未タ打電シタル形跡ナシ

ハ、独逸人、ウウハ

右者元支那側兵工廠技師ニシテロイナル通信員

トシテ從來ヨリ在奉口申ノ者ナルカ曩ニ英文

ノ「田中内閣ノ滿蒙積極政策」ヲ在奉知人

由ニ配布セシコトアリ時局以來上海ロイナル社

宛打電シ居ルカ、時々排日的記事アリ

ト、エストニア人、アーメンデ

右者時局以前ヨリ奉天在任中ノ者ニ、上テ事

以來獨逸新聞ニ通信ニ居ル模様ナルモ未夕嘗
テ打電ニタルコトナシ

(2) 在奉外國領事館ノ通信情況

在奉外國領事館ノ時局通信ハ總テ暗号通信
ニシテ内容判明セザルモ其電信數量左ノ如シ
ハ、ソ聯邦總領事館

時局以來毎日モ二、三宛長文電報五六通ヲ
電信ニ居リ在奉他國領事館ニ比シ遙カニ打
電數量多シ

只米國領事館

毎日暗号官報ニ一通ヲ打電シ居リ其ノ如量

ノ聯邦ニ世ク

ハ英・独領ヲ鉅ノ打電如量ハ極メテ僅少ナリ

ニ駐哈米國總領事ハソノ駐日米國大使鉅

ニ第書記鉅

サリスバリ一第ノ動靜

本名第ノ動靜ニ關シテハ本月二十日附關關機

高外外ヲ五五三二号ヲ以テ既報ノ通ナルカ去十

九日奉天地方維持委員會ニ表金鑑ヲ訪問

左記事項ヲ調査シタル後表金鑑ニ對シ何故ニ日

軍ニ抵抗セサリシヤト廣固シタルカ表ハ之ニ對シ張
學良モ不在中ノ事ナリシヲ以テ無抵抗主義ヲ
以テ終始シタリト答ヘタリト云フ。

記

(1) 日本軍部及憲兵隊並市政會所等ノ干涉程云

(2) 匪賊ノ状況

(3) 日本軍占領後ニ於ケル中國人ノ生活狀態

四 自稱在北平國民政府實業部地質調查所

鶴逸人技師

パニドトニ

右者肩書調査所ノ命ニ依リ同所員中國人陳

偉ヲ曰伴客月上旬哈爾濱ニ赴キ地質研究調査
中ノ此所定ノ調査ヲ終ヘタルヲ以テ歸任ノ途ナ
リト稱シ本月二十日大連出帆ノ天潮丸ニテ赴平
ニタルカ月一人ノ從者一言之依リ本名ハ吉林省
龍運ニ関シ黑龍江省方面ニ於ケル農民ノ般
動靜視察旁々張學良及蕭福麟ノ意智傳
達ノ爲赴哈シ居リタル模様ナルカ管办來往中
特異ノ言動ナシ

五 天津駐在伊本利大副總領事

工ルネイロシ

(J. S. Haynsworth) 五三年

在北平伊太利公使議負

アール、エヌ、ビルダ

(R. M. Buis)

三〇年

在上海伊太利海軍武官

ビル、エフ、トータ

(F. F. Tota) 二七年

在亞平ロンドン、デトリーマイル紙特派員

英國人

ローレンス、インパイ

三二年

Laurence Chapoy

右者何しを廿月廿日入港ノ河南丸ニテ塘沽ヨリ来

運ニ同夜九時大連発列車ニテ奉天ニ向ヒタル前

記伊太利人三名、約三週前ノ豫定ヲ以テ奉天ヲ中

中心ニ今回、滿洲事變ノ情況ヲ調査シテ本國ニ復
命一為、又英人イニペーハ同務調査ノ上、本國新聞ニ
信ノ為ナリト語リ居タルニ付、引續キ、言動注意中
ナセミヨリ

右者今回、事變發生以來支那要人ト提携シ何
事カヲ畫策スルハ、大連、奉天、沈南面ヲ鎮繁
ニ維持シツ、アル件ニ付テハ、既報ノ通ナルカ本月十
六日、日時局ニ関シ左ノ如ク陳シ居タリ、

(1) 今回勃發セシ滿洲事變ノ原因ニ付テハ、自方等用
知スル所ニ非サルモ、近來滿洲ニ於ケル支那ノ對日

他甚之。今因支那方面、日本、滿洲、龍谷、
權益、侵害也。トスル行動ニ出テ、先爲人日本、
自己、權益確保上、軍ヲ行動ス。ニ出テ、カ、
結果ニシテ、何等不思議ニ非ス。

(2) 然ルニ、支那側、事ヲ構ヘ、自ラ絶対無抵抗
主義ヲ標榜シ、事件ヲ國際聯盟ニ訴ヘ、凡有手段
方法ヲ以テ、惡毒ナル逆宣傳ヲ爲シ、以テ、日本ヲ牽制
セトシ、サ、アリ。

(3) 國際聯盟ニ、支那代表ノ中傷的逆宣傳ニ、以テ、
ラ、
結果ニ、聯盟締結國ニ、非ハル米國、

代表ヲ聯盟理事會ニ参加セシムルコトニ至ル
蓋シ事件ハ紛糾ニ至大化セムトスル傾向アリ

(4) 國際聯盟、採リ得ル行動ノ可否ハ兎モ角トシテ

日本ハ余リニ聯盟、行動ヲ重要視シ居レルヤノ感アリ

即日本ハ聯盟ヨリ警告ヲ受ケルヤ勿レテ懸念ス

軍事行動ヲ變更シケルカ如キ事アルハ最モ遺憾

トスル處ナリ日本ハ此材料ヲ利用シ斷片ニ作部

ニ出テサレハ將來最モ悲シムハキ結果ヲ招来スルヤ

モ懸念

(5) 今回ノ東亞會議ニ伴ヒ滿洲ヲ中心トスル政治

運動の存二派二分類セラルルヤノ感アリ
即チ一ハ張宗昌ヲ他ハ宣統廢帝恭親王ヲ指ス
セムトスルモノノ如シ

(6) 今回黑龍江省ノ政權ヲ否認シテ独立ヲ宣言
タル張海鵬ハ嘗テ子彼力極東軍司令官當時ヨリ

自今トハ果ニ親密ナル關係アリ依テ率エシテ彼力
黑龍江省ノ政權ヲ掌握スルニ於テハ自今等ノ反
ソ政治運動遂行上幾多ノ利便アリ

事實行動ニ着キテ得ル材料ノ不遠列表スル
ヲ確信シ居リ

(7) 張海鵬軍、進出に付、既に吉林省、新長春、
一箇の亮布、了解成立し居る、以て吉、黑兩省、
完全ナル独立に相俟、帝親王ヲ推戴シ、滿洲ニ
於てハ帝國家樹立運動ニ着手スルモノト觀測
セラル云云

七、滿洲事變ニ對スルノ聯邦ノ態度

今回、滿洲事變ニ關シ、聯邦外務委員長リト
シテ、又其努力ヲ以テ、陸海軍、文通其他ノ
要人ト應合、議ヲ開キ、決ニ如キ政策ヲ行ハント
ス

(1) 日軍ハ東支鐵道ノ範圍及其附屬地ニ於テ
予軍事行動ヲ為ストヲ得ル

(2) 遠東ノ國防ヲ鞏固スルニ爲テ遠東各地ニ増兵

(3) 滿洲事變ニ對シソ聯邦ハ中立ヲ嚴守スルモ

事件力東鉄ニ波及シテ、日軍力ソ聯邦ノ勢

力範圍内ニ侵入セル場合ハソ聯邦ハ漸然正當

ナル事処置ニ出ス

ハ在奉外國銀行團ノ動靜

在奉外國銀行團ハ先般滿洲銀行團並ニ在奉外國

銀行團ハ、昨午、午後六時、日、滿、蒙、中、各銀行團、

ニテイバンクニ集合シ、座長ニ英人ハニシニテ据テ協
議シタル結果、英人經營ノ銀行會社一五、米國側
三、佛國側ニヨリ各代表ヲ出シテ協議ノ上左ノ如キ
意味ノ聲明ヲ出シタリト

記、

奉天附近ニ於ケル經濟界ハ、強學良復辟セシ
時ハ將來益々充實ヲ来スヘシ

即チ一例ヲ舉ゲルニ奉天大政府ハ南京政府ニ對シ
今年ニ七千萬元ヲ送付シ居ルヲ以テ之ヲ中止スル

一、奉天大政府ハ南京政府ニ對シ、餘額ヲ送付スヘシ

本会各ニ集合スル会社、對支關係ノモノナルヲ以テ事
件ニ依ル一時的ノ動搖ニ左右セラルトナク閉鎖シ
居ルモノ、速ニ開業シ、離奉ルモノ、如キトナク密
以時局ノ平靜スルニ先キテ開業シ業務ノ進展ニ
努カスヘキナリ云云。

以上

6

奉天
本省

十月廿四日
左

幣原

林總領事

才一〇九四号

最近政府ノ在外使臣及聯盟代表ニ對スル御訓示等ヲ

見ルニ滿洲ニ於ケル我軍事行動ハ既ニ一段落ヲ告ケ

漸次復舊ノ途ニアリト爲シ之ヲ各任國及聯盟ニ對シ

説明セシメツ、アリ右ハ政府ノ御方針並ニ墨トシテ最

モ様宜ニ叶ヒ居リ我國ニ對スル國際間ノ空氣極メテ

險惡ナルノ秋出先ヲシテ右方針ヲ無視スル者如キ

行動ニ出テシムルハ絶対ニ爲ニカルハ事告ナルモ今更

事實一勃發以來本官累次ノ電稟ニ拘ラズ不幸
ニ、レテ滿洲ニ於ケル事態ハ豫期以上ニ擴大セラルルニ
至リ最近稍小康ヲ保テツ、アルモ北昂線方面ニ於ケル形
勢並北寧線方面ニ於ケル治安狀態ト中央部ヨリ派遣
セラルル軍人ト当地中樞軍部トノ折衝ノ模様ヲ及聞
シ之ヲ考察スルニ政府ハ今後果シテ其方針ト軍部行
動ヲ完全ニ一致セシム得ルヤ憂慮ニ堪ヘサルモノアリ當
地方ニ於テハ軍部以外滿鉄本部ニ於テモ軍部ノ
積極行動ニ共鳴スル者鮮カラズ總裁副總裁若
上京中ナルカ爲事ヲ慎重ニ處理セシムル社會ノ望

表題ル甚シキモノアリ滿洲ニ於ケル政府機關ノ存在
カ我國際關係ニ甚大ナル要因トナリツ、アル今日
單ニ政府カ軍部行動ヲ支配シ得サルニ止マラス
滿鉄ノ行動ニモ霸制ナカラシムルカ如キコトアリテ
遂ニ國事ヲ收拾シ得サルニ至ラシムルナキヤヲ恐ル此
間ノ事情、到底文意ヲ以テ是シ能ハス至急面陳
ノ要アリト思考セラルルニ付本官一時歸朝方直ニ御
可アリタリ尙本官不在中ノ缺務ハ現在缺員ニテ支
障ナキ見込ナリ

6

奉天

十月廿九日 午

歸京

林總領事

才二四〇号

往電才一二四号 二閣之

今次滿洲事件ニ関シ國際聯盟力支那事情、實際

ニ免カタル認識ヲ缺キ忽卒ニ事ヲ処理セトセシ

難ハヒヤルハ明カタル処当方面、実情ヲ觀察セシ

諸外國人ヲ見ルニ其多クハ滿洲現下、物狀總態ニ

於テ急速日軍撤退、不可態ナルコトヲ了解セシ

又、ノ如クナルハ付、此際我方ニ於テ從來ノ好惡ヲ

離レ進ムヲ聯盟ヨリ調査員ヲ派遣セシムル様仕向
クルコトハ聯盟ヲシテ滿洲ノ実情ヲ了解セシムルニ
力アルハキ、ミナラス今次事變ノ処理ニ付殆ト行
詰リ、狀態ニアル聯盟ニ對シ、一、拔道ヲ与ヘ之ヲ善
導シ得ル所以ナル中ニ存セラル。

尚ホ、庄司令官モ聯盟調査員ヲシテ各方面
ノ実狀ヲ知ラシムルヲ有利トスト、意見ナリ即
參考迄。

6.

哈東賓
本省

十一月七日
八日新

幣原

大橋總領了

才五十六号

奉天苑閣下宛電報才一二十一号二關之

齊々哈爾進擊ニ關スル林總領了ノ意見ハ本官ノ

無条件ニ賛成スル所ニシテ此種ニ果シ斷牛ト

シテ軍部ヲシテ其希望通り実行セシムラレタレ

若シ此儘ニテ打過クハニ於テハ假令江省軍ノ受

ケタル損害多大ナリトスルモ屢次、往電ハ通當也

ニ於テハ今日迄我方ニ對シ必スシモ惡感ヲ有セザル

二見エタル下超迄其部下ヲ江省軍に援ス派遣ニツ
アル形跡見エ今日素質劣弱ナル張海鵬軍ヲ單獨
ニテ奇々略ルニ集込マセントスルモ恐ラク不可能ナルノ
ミナラス假ニ集込マセタリトスルモ清水額ヲ屢次
電報ノ通拜軍カ現地ニ於テ支持セサル限リ其地
信ヲ維持スルコト困難ナルハク一方馬占山ヲ買収其
他ノ方法ニ依リ懐柔スルコトハ今トテテテハ絶対不
可能ナルノミナラス假ニ買収ニ得タリトスルモ其直
屬部隊ニ非サル上支那軍ニ珍ヲラキ固チ決心
ヲ有スル江省軍ヲ如何トモスルヲ能ハヌサル也ナリ

依于政制、北滿經略方針ヲ実行セシトセ、此際一舉
有々哈爾ヲ実ニ江省軍並其友軍ヲ撤底の
撃破シタル後適當ナル我方ノ傀儡ヲ有々哈爾ニ
据ヘル外途ナキ力如シ。

(但シ本年迄、目下政府ニ於テ默認シ居ラント中ニ思
ハルル滿洲独立計劃ニ賛成シ難ク夫レヨリモ表面
ヨリ堂々ト全滿洲ノ保障占領ヲ実行シ一切ノ討支點
案解決迄一時之ヲ我方ニ於テ統治スルノ策ニ出ツ
ル方遙カニ公明正大ニテ徹底的ナリト思考ス)然レ
レハ總テカ不撤底トナリ折角ノ北滿經略方針ニ全

然畫餅ニ歸スルコトナシ、当初ヨリ此滿ニ手ヲ付ケ
サリシナレハ未タシモ一度手ヲ付ケタル以上中途半端
ニ終ルコトハ滿洲政策全對ニ対シ救フ可ヘカラサル大害
ヲ醸スモノト云ハサルハ毎カラス、尙々哈爾濱ノ侵入ニ關聯
シ考慮ス可キ矣、ハ対聯盟及蘇聯關係ナルカ外一ノ關
係ニ付テハ我カ江橋修理ヲ確保スル必要其他適當ノ
理由ヲ強調シテ主張ルコト出來サル筈ナク又亦二ノ
關係ニ付テハ若シ蘇聯協力之ニ刺戟セラレテ出兵
スルカ如キ場合ハ之ヨリ千載一遇ノ好機ニシテ我
國ハ宜シク國力ヲ擧ゲテ此人道ノ敵ヲ遂ニ撃テ

以予極東永遠ノ平和ノ確立ヲ期スヘシ本宮ノ見
処及ヒ当地ヲ通過スル多量ノ内外旅客ハ何レモ現
在ノ如キ蘇聯ノ窺念セル内情及接壤諸國トノ
複雑ナル關係ニ顧ミタルニ此ノ際滿洲ニ於テ日本
如何ナル行動ニ出ツムトモ彼ニ恐ラリ我ヲ正面
敵トスルカ如キ元氣ナルハレト云ヒ居レリ尤如何
ナル機ニテ敵對行為ニ出ツムトモ計リ難ク
且支那側ニ現ニ昂々漢溪附近ニ才三線ノ整頓ヲ
振リ我軍ニ依ル東支線破壊ヲ導キ以テ蘇聯ノ
出兵ヲ促カヌニト策動シツ、アルヤノ情報モアル

二付惣東支線ヲ「ク」ハスル場合假ニ蘇聯力二三萬
ノ兵ヲ出シ来ルモ之ヲ撃破シ得ルニ足ルハナキ程交ノ
準備ヲ爲シ置ク必要アルハナシ
目下当地ニアル「ア」ハ「ト」ニシテ其他ノ外國新聞記者
ノ意見ハ極端ナル不況ニ惱ミ居ル世界ノ現勢及支
那カ欧米ニ於テ信用ヲ落シ居ル事今日ヨリ甚シキハ
無キ事實ニ鑑ミ此際日本カ滿洲ニ於テ如何ナル行
動ニ出ツルモ帝國ハ勿論聯盟ト虽多少ノ言葉ノ上ノ
非難信ハナスモ經濟封鎖差ハ武力行使ニ依ルハ
害ノ如キハ如何ニシテモ想像シ得ラレナキハナシ

特ニ鋒先ヲ蘇聯ニ向クル事トモナラハ目下五年計
畫ヲ極端ニ恐レ居ル米國ハ勿論保守黨ノ天下トナ
リシ英國王我方ニ同情ニスレ妨害的態ニ出
ソハキ日事ハ萬無カルハク唯日本今回ノ活動力
因トナリ支那自共管論抬頭スハキ力有ハ支那ヲ
救フ唯一ノ方法ナリト云フニ略一致シ居ルヲ果シテ
然ラバ此ノ機ヲ逸セズ徹底的ニ滿洲問題ヲ解
決スル胆ヲ以テ進ミシテ交ウ有々哈爾濱ノ如
キハ之カ爲ニ非ニ必要ニシテ此際兎角躊躇スル
事ハ此支滿洲特ニ江橋附近ニ流サレタル事ナ
血闘ヲ一室ニ舉セシムル所以ナリト思フス、

6.

上海
本省

十一月十七日
午後

幣原

重光公使

才一二八号

永井次官谷正細亞局長

当地陸軍武官田代少将に至急帰朝ヲ命セラレタ

方東軍参謀長ニ轉任、模様ナル趣ナリ曰少将

滿洲事件発生以來再三意見ヲ上申シ東軍

行動ニ制肘ヲ加フル必要ヲ説キタル由ナルカ

軍部ニ嚴シク松ヲ有スル曰少将之依リテ滿洲

ニ於テ軍部ノ行動ニ改善ヲ加ヘントスル意向ヲ如

山口少將、滿洲事件ニ関スル意見ハ極メテ
アルモノニシテ且關東軍ノ首ヲ腦部ノ人事關係
其他ノ遺方、外務省ノ機關ト、關係、建直シ等
ニ於テ鞏固ナル意見ヲ有スル処同少將ハ右意
見ニ、レテ密シラルルニ於テハ困難ナル地位ニ就クコト
ヲ已辭セスト内情ニタリ同少將歸東ハ十七日當
地罷シ、上ハ外務省ニモ出頭スハキニ付以テ、真内
密即倉迄

尚田代少將ハ林總領事トハ漢口時代ノ知己ニシ
テ同總領事ニ對シテハ一方チラヌ敬意ヲ拂ヒ居

林總領事ハ同少將ノ爲メニ、其ノ地位ヲ固メ

奉天

十一月廿四日

幣原

長島總領事代理

第一四三二號

往電第一四二〇號之閣下

(一) 当地ヨリ出動セル部隊急遽引揚ニ至ルハ状況ニ

関シ確實ナル筋ヨリ聞込メル所ニ依リ、当地

軍側ニ至リ、中絶ヨリ再々引揚方命令ニ接シ

タルモ先頭部隊力既ニ饒陽河附近ニ於テ衝突

中ナリ、關係モアリ、右方テ無視ニ豫定行動

ノ実行ニ進ムコトトシ居リ、モ、又嚴重ナル命令

2 接スルハ決テ各ニ于夜半引揚命令ヲ出ス
2 レルモノナリ当时幕僚等ハ既ニ連袂辞職ヲ決
意シ極力幹部ニ迫ルニモ參謀長等ヨリ將來再
ヒ機会ナキニ非サムハク事志ニ違ハハ決シテ幕
僚ノミヲ見殺スルモノニ非ス軍司令官以下
一連托生ノ決意アル旨ヲ披瀝ニ漸ク之ヲ宥メ
得タル実状ニシテ實ニ劇的光景ヲ呈セリト云フ
2 性ヲ二当地軍部ノ方針ハ事實当初ヨリ我々既
権益ノ擁護邦人ノ生命財産ノ保護諸種ノ難
ノ解決ノ範圍ニ止マラス満蒙ヲ打ツテ

予新政权ヲ樹立シ茲ニ確固不拔ナル帝國ノ地歩
ヲ確立セラルトスルニアルカ如ク曩ニ林總領
事ヨリ今次ノ時局ニ既ニ所謂五大項目ヲ以テ收得
拾シ得、キ範圍ヲ超過セル旨累次進言セ玉
タルモ全ク右ノ觀察ニ出テタルモノト察セラル而
レテ最近ニ至リハ更ニ一步ヲ進メ支那本部ヨリ
隔離セル往年ノ張作霖作亂政村ニ類スル新政权
ノ樹立ノミヲ以テテ充分トセズ此好機ニ乘シ滿蒙
ニ新独立國家ヲ建設シ永遠ニ事実上我國ノ領
土下ニ置カントノ議有カトナリツツアル如ク昔

舊政權、徹底的排除地方自治制度、創設新

滿政權、擁立宣統帝、連出之等、ト云々右等

方寸ニ出テハ、無ク後ヲ既ニ北滿經略ニ大任

ノ目鼻着キタリト認メ得ル今日右ノ大理想ヲ

實現スルカ爲其前途ニ横ハル唯一ノ障礙トシ

テ錦州政權ノ撲滅ニ進ミ、トスルハ從來ニ於

ケル幾多ノ遺言ヨリ判斷シ極メテ自然ノ途路

ヲ述ルモノト謂フハ、現ニ有力ナル軍人中公敵

ノ面前ニ於テ公然新國家建設ノ必要錦州政

權撲滅ノ進行ヲ公言シテ憚ラサル者鮮キハ

甚クシテ一ニヨリテハ中央ニ於テ出先ノ方針ヲ定メ

ニ於テハ一律軍籍及國籍ヲ脱シ新國家建設

ニ向テハト極言シ現ニ本三十日開催ノ筈ナル全

滿時局聯合會ノ議題中ニモ一新獨立國家タル事

加ヘ條アリ風靡スルニ依リ之方真意ハ在滿

邦人何レモ日本國籍ヲ脱シ新ニ日本ノ勢力

下ニ建設カルハ中日、滿、鮮、蒙、露ノ五族共和

國ニ參加スヘト云フニアリ

右ハ一見荒唐無稽ノ感アリト雖モ事實蓋シ

必ズノ事則ニ倣スルニ少クトモ此意氣盛ニ

4 笑之付し難きモノアリ

3 由此觀之 今回、錦州方面出動、政府ノ機宜ナ

ル即措置ニヨリテ 阻止セラルト雖モ曩ニ哈爾

爾賓進兵不能トナリタル後形ヲ變ヘテ遂ニ有ク

哈爾進出トナリタル事例ト同様今回、即措置

元令收ニ於テ今ニ再出動ノ絶無ヲ保障シ難ク

支那軍ノ國內撤退実行セラルザル限リ材料云々

云々毎ニ否自ラ求メテ材料ト口實トヲ造リ何處

迄モ當切ノ計畫実行ヲ計ラントスルハハ極メテ

時勢ナリ云々假令錦州地方一帯軍ヲ

東北軍力我方ノ希望ノ通愈國內ニ撤退スルニ至
ルトスルモ地方ノ行政力依然舊東北政權ノ下ニ
アル限リニ陸軍ノ兵力ノ背景ナキ結果甚シク
其勢力ヲ威殺セラルヘキハ推察ニ難カラザルモ所
謂新國家建設ノ見地ヨリモ依然一ノ障礙ヲ爲ス
モノト言フベク陸軍之ヲ排除シ撤兵地域ニ於テハ
行政ヲ奉天新政權ノ下ニ隸屬セシムル力有之カ
復返リ又ハ拍込策トシテ今後有ラズル策謀ノ用
ヒラルベキコトノ事要以て後幾多ノ事例ニ照シ照然
ク考ヘザルモ斯ノ如キニ元來未だ先ノ軍限リニ至リ

敢行スハキモ一ニテラザルハ勿論ニ、レニ滿蒙ノ略
束乃至時局收格ニ対スル帝國政府ノ根本方針
ノ如何ニ應ジテ割リ出サルベキモ一ナルヲ以テ根本
方針ト一括シテ豫メ御考慮相成置クノ必要アリ
リト信ス。後細結總領事ヨリ御聴取ノコトト存スル
ニ卑見何事御考慮迄。

錦州方面ノ日本軍隊撤退ニ由ル支那新陳記事

十月廿日 民國日報

日皇軍情ノ横行ヲ制止ス

蔣作賓ヨリ北平宛ノ電報ニ依リ幣系外相、最近

天皇ニ對シ日本、最近ノ外交ノ失敗ハ日本軍隊が致

ル支ニ於テ自由ニ行動シ國際上、信用ヲ失墜シタ

ルニ因ルヲ以テ天皇ヨリ軍隊ノ行動ヲ制止セラル

ヒ目、上レタルが日皇ハ既ニ各地ノ軍隊ニ對シ政府

ノ命ニ依ルニ非カシテ自由ニ行動スベカラサル旨命令

シタリト云フ

同日申報

日皇撤兵ヲ命ケス

韓作賓ヨリ張學良ニ對スル報告ニ依リ、日軍軍部が

此次悍然トシテ國際公約ヲ顧バ出兵シ軍ヲ占領

區域ヲ日々ニ擴大セシメ日帝ノ國際信用ヲ喪失セシメ

タル爲メ外務當局ハ之ガ対策ニ苦シミタル結果

前日幣原外相ハ特ニ天皇ニ拝謁シ軍人ノ妄言

等ヲ制止セラルヘニコトヲ請ヒ並ニ利害關係ヲ詳細

上奏シ最後ニ辭職ノ決心ヲ以テ日皇ノ聽許ヲ得

テ岩々シラスニハ外相ノ職ヲ辭シ一切軍人ノ主張ニ

6.

南滿
奉省

十二月
六日
七日前

幣系

重光公使

冲一五八六号

一、奉天事件突発之日、日本軍力張學良軍に衝突

したる以來、錦州附近に集自結せる學良軍及錦

州臨時政府に於て、其賊便衣隊に指族し所有

方法を以て日本軍及日本、極端に危害を加へ、又

以て地方撓亂を試み、下り學良及其配下力不

面無抵抗と稱し、裏面は、於て盛に日本軍に對し

敵討行為を獎勵し、下る事實あり、其の爲

「支那」は他國ト事ヲ構フル場合表面無抵抗
主義ヲ装ヒ事實一方ニ勝テ「ボイコット」其
「他排外手段」ニ依ル經濟我軍ノ方法ニ依リ他方
土匪便衣隊等ヲ使用シテ後方攪亂ノ「ハル」ナ
シ戰術ノ方法ヲ採用スル一般既定ノ方針ニ致
スルモノト言フハ「若シ日本軍」ニ「テ」土匪ノ討
伐ヲ徹底シ其ノ根柢ニ及ブトキハ勢ヒ錦州
附近「支那軍」ト衝突ヲ免レサレハ「レ」
「願」維新外交部長「其」錦州附近「日支兩
軍隊」衝突ノ形勢ヲ「願」慮シ二十四日南京ニ

於予米英佛三國公使ニ對シ日本側ニ予異存無
キニ於予ハ錦州ヨリ山海關ニ至ル地域ヲ中立地帯
トシ日支兩軍ヲ此ノ地ニハラシムル且現ニ滞在スル
錦州附近ノ支那軍隊ヲ全部内地ニ撤退スル
尚右ニ對スル保障ヲ當事國ヨリ右三國ニ爲ス
ハキコトノ考察ヲ提出シタリ右顧維鈞ノ提
案ハ二十一日東京ニ於テ日本外務大臣ニ提出セ
ラレタリ

六日日本政府ハ熟考ノ結果日支ノ困難ナル現在ノ
事態ニ對シ右ノ爲メニ事件解決以來日本政府

ノ決定方針ニシテ聯盟理事會ノ勸説ニ係ル

主義タル事態ヲ局ニ限シテ出来得ル大々悉

化セサルコトヲ緊喫唯一ノ方法ナルコトヲ思ヒ多々

ノ困難ヲ拂シ茲ニ其ノ中車立地帶ノ設定ノ提

案ヲ受諾スルコトニ決定シ其ノ趣旨ヲ以テ翌

二十七日之一対スル回答ヲ発セリ之ト同時ニ事態

ノ急迫ヲ救フ為我軍部ニ於テハ支那側ノ軍

隊撤退ノ诚意ヲ信シ焉對峙伐進行中ナルニ

拘ラズ多大ノ犠牲ヲ忍ビ軍隊ヲ後退セシメテ

我軍隊トノ衝突ヲ避クル為全力ヲ盡セリ

四、今回自方南京滞在中、顧外交部長下面會合せる力
一、兩三回ノ機会ニ於テ繰返シテ説セルハ現在ノ日支兩
國ノ困難ヲ脱スル爲ノ急所ニシテ唯一ノ方法ハ日支
兩軍ノ新衝突ヲ防止スル爲、双方ニ於テ全力ヲ盡
スルニ在リトナス、莫ナリ、兩軍ニ於テ何時新ニ衝
突ヲ見ルヤ豫測ヲ許ササル、今日前記中立地帯
設置ノ案ヲ實現スルハ極メテ重要ナル事ニシ
テ、日中政府カ既ニ受諾セル以上、其那側ニ居テ之
ノ同様ノ意思ヲ示サレタリ、旨動説シタル所以ナリ
五、然レ、外交部長ハ日中軍隊ノ一時馬賊ノ討伐ヲ

延期に引揚ケタルヲ見既ニ其計劃實現、必
無キに至リト感シタルカ又、其提案ハ軍ニ美
米佛ハ三國又ハ國際聯盟ヲ更ニ中ニ地帯ノ
問題ニ引入ル事能ク益々複雑化シテ曰キテ牽制
シ得ト彦ハタルカ又ハ學生運動等種々内部ノ困
難ニ出テタルカ之ヲ明カニシ得サルモ今日ニ於テ
ハ顧維鈞氏ハ其最初ノ提案ノ趣旨實現ニ
冷淡ナルカ如シ自方ハ其事實ニ非サルヲ希望シ
テ已マズ自方ハ顧維鈞氏ニ對シ若シ其ハ國民ノ
代表トシテ日本側ニ於テ多大ノ困難ヲ冒シテ人

議セル今日民國側ニ於テ實現セラルニ於テハ事態ヲ局限シタル衝突ヲ避ケ全局ニ善処セントスルヲ趣旨ニ華ラントミナラズ既ニ再ニ衝突ヲ見タル滿洲ニ於ケル日支兩軍カニ及ホズ反動作用ハ甚タレク憂慮セラル旨指摘シタリ、

7.

南京
本省

二月八日
八日前

芳沢

上村總領事

才一三四号

日夜ノ事ハ件ハ海軍ノ電報ニ依リ御差知ノ通ナルカ

実情左ノ通り

一本官等乗艇ノ雲陽丸ハ一日夜モハルタニ二横着

テシテハタルカ午後十一時突然引續キ二回ノ爆

裂彈破裂ノ如キ音ヲ聞キ續クテ小銃ノ聲ヲ

下リ同時ニ雲陽丸上ノ海軍通信兵ノ有兵力

ヲシタト云フ事ヲ聞キタルカ如クハ後方

軍艦より發砲し又「ハルク」上、警戒隊よりハ
機関銃ヲ發射シ始メ同時ニ雲陽丸に鎗ヲ拔
キ上流ニ歸難セリ我方ノ砲砲ヲ南ヲヤ外國軍
艦モ一齊ニ消燈至急旋回ヲ始メタリ

ニ道路より「ハルク」ニ通スル棧橋上ニハ手榴彈一破裂
シタリト見ラルル根ヲ跡、歴然トシテ残リ血痕
亦著シク残リ居ルヨリ何者カ「ハルク」前ノ道
路上ヨリ手榴彈ヲ投ケ左方哨兵ノ足許ニ破
裂シタルモノト思ハル哨兵一名ハ脚部ニ重傷
ヲ負ヒ血多量ノ爲ニ日夜死シタリ他ノ哨兵

輕傷^ニ者^ハ手榴彈^ノ破片^ニ依ルモト見
外^ニ輕傷^ニアリ

三、犯人^ハ一人^{ナリ}ヤ多^クモ^{ナリ}ヤ元^ノ明^カナ^ラサルカ^ハ

ル^ク警戒隊^ハ雲陽丸^ヲ引揚^ゲハル^クヲ微^ニ退^ス

一、際敵ヨリ襲撃^セラル^ルヲ惧^レ居タルモ犯人^ハ

逸^レ早^ク逃^レ亡^シタルモ^ハ如^ク敵ヨリ^ノ襲撃^セ等

全^ク無^カリ^ニ趣^{ナリ}手榴彈^ヲ投擲^シ犯人^ハ後方^ニ

ニ相当^ス人数^{アリ}水銃^ノ連射^ヲ爲^シタリト^モ述^ベ

アリ要スルニ突^ニ差^ハ肉^ノ出^ル事^{ナリ}ナ^リ各^ノ人^ハ

記憶^明確^{ナリ}

四 我軍艦より一發砲の十發ナリニ趣ナルモ態ト市
街ニ於テ下ルモノヲ避ケタルニ依リ損害ナカリシ様
様ナリ。

五 柳子山ヨリ一發砲の我軍艦ニテハ確ニ目撃セリト
主張シ居レリ。

7

北平
省

二月八日收

芳沢外務大臣

矢野参事官

才四三号

南京、後、本、官、宛、電、報

才五号

在、支、公、使、宛、才、一、〇、号

往、電、才、九、九、号、之、関、に

一日、夜、ノ、事、件、ニ、関、ス、ル、一、日、附、外、交、部、宛、公、使、館、名

佛、ノ、覚、書、在、文、左、ノ、通、リ

宛、書

南京下関日清「ハルグ」警戒中、帝國海軍、本
月一日午後十一時突如不法之モ中國正規軍ヨリ
攻撃セラル之ト同時ニ獅子山砲台ヨリ五発砲
撃ヲ發シ重傷者一名及輕傷者一名ヲ出ス至
ルヲ以テ帝國海軍、自衛上已テ之ニ反
撃ヲ加サル処中國側、由モナク沈黙セルヲ
以テ帝國海軍、之ヲ已ムヲ反撃ヲ中止
シ攻撃ニ依ル損害ヲ最小限迄ニ止ムルニ努
メタルニ日本公使館、之ヲ以テ最近上海方面ニ
軍事態ノ惡化ニ鑑ミ在南京帝國領事及館員

並ニ在留邦人ヲ全部下関日清ハルケルニ避難セシ
ムルト同時ニ在南京帝國領下ヲシテ中國各關係
機關ニ對シ累次慎重措置方警告セシメ置キタ
ルニ拘ラズ中國側力突如キ件ノ如キ挑戰的キ
段ヲ出サタルニ甚タ不都合ト云フハシ鮮ク依テ
帝國公使館ニ茲ニ不取敢國民政府外交部ニ
對シ嚴重抗議ヲ提出スルト共ニ本件ニ關スル帝
國政社ノ正當ナル要求ヲ推測ヲ保留スルコトヲ声
明ス

昭和七年二月二日

在中華民國日本帝國公使館

國民政府外交部御中

Handwritten notes in the top left section of the grid, including a large 'X' and some illegible characters.

Handwritten notes in the center of the grid, including the characters '10' and '11'.

Handwritten notes in the bottom left section of the grid, including the characters '12' and '13'.

6

哈爾濱省

九月廿六日

幣原

大橋總領事

才二四五号

滿鉄力東支管理局長「ル」ゾ「ル」、秘書ヨリ入手シタ

ル情報ニヨリハ蘇聯ハ日本兵力北滿ニ進入シ速支

権益ヲ侵ス場合ニ積極的ニ出兵スヘキトニ決定

シタリト、コトナシカ、本官及当地英米領事等ヨリ

ル処ニ於テハ蘇聯ハ其内情ニ鑑ミ此際日本ヲ正面

ニ敵トシテ出兵スルカ如キ「ヤ」ント観測シ居ルニ付

五、当地滿鉄ノ入手セル情報ニ依リハ我軍

既ニ洮南ヲ占領シ石原顧問ヲ洮昂局長ニ任命シ

同線ヲ占領シタル由ニテ右ニシテ事實ナレハ我兵ハ

遂ニ昂々渡ニ進出スルコト当然ナルハ時期線ノ場合ニ

ハ蘇聯トシテモ對抗上居留民保護東支權益擁

護ヲ理由ニ東支沿線ニ兵^出セストモ限ラサル処右ノ場

合ニハ我方ト衝突スル危險生スルノミナラハ此際蘇

聯軍ノ東支進出ヲ認め九ハ我滿蒙政策ニ重大ナル悪

影響ヲ及スハキニ鑑ミ此際至急蘇聯ニ対シ我

方假リニ今後北滿ニ出兵スルモ右ハ全ク我居留民保

護ノ目的以外他ノ意ナキモノナルニ付斯ニテ急

對抗的出兵ヲ爲ササル様申入ラレ然ルニモ拘ラス
出兵スルハ如キ場合ニハ當方トシテ重ナル決意ヲ
爲ス必要アリト存セラル

軍部ト領事官トノ關係、

今次ノ重要ニ於テ軍部ト領事官トノ交渉ヲ要約
スルニ領事官ニ於テハ事態、拡大防止ノ政府ノ方
針ニ基キ出来得ル限り任地中國官憲ト協力シ
テ治安維持ノ方策ニ出テントシタル爲出来得ル
限り各地ニ占據セント欲シタル軍部ノ行動ヲ制肘
スルカ如キ有様トナリ爲テ兩者間ノ交渉必ズモ円滑
ナラント云フヲ得ス、

軍部カ我領事官ニ豫メ相談セテ土地ヲ占據シ又
ハ軍ヲ派遣セル事例領事ノ反對意見ニ拘ラズ

隊ノ武装解除ヲ行ハル事創、領事ノ反対ニ拘ラズ軍
政様、市政ヲ布ケル事創第アリ、

尤モ領事ノ意見ヲ容レ公安隊ノ武装解除ヲ行ハ
サリシ場合モアリ領事ニ相談ナリ海兵セル場

合ニモ集暇ナカリシヲ理由トセル場合モアリ、

然レトモ大佐ニ於テ軍部ハ領事ノ意見ヲ容レズ

殊ニ奉天ニ於テハ軍部ハ總領事ノ領例トハ接觸

時タルニ努メタル傾アリ、

6

北平
本省

九月三十日
午後

辭原

矢野参事官

才四七五号

本官罷奉天宛電報

才六一号

往電才六〇号ニ関シ

二十九日首席公使ヨリ國回章（「イニゾイビ」ニアル）

ヲ以テ廿六日附同公使宛北平外交檔案処來翰官

ヲヲ回附ニ来リ右書翰ハ要領左ノ通

北平鐵路局ヨリ日本軍飛行機ハ二十四日才

○二號列車ヲ興隆店附近ニ於テ機南銃ニテ攻撃
シ乗客中死者二、傷者五ヲ生セシメ(二)二十五日
Jung-yang-Ho 附近ニ於テ○五號列車ニ爆彈二
個ヲ投下シタル上數駅南追跡シ(三)又同日白旗
堡附近ニ於テ機南銃ヲ発射セル事實アリ
ノ如キ日軍飛行機ノ一行為ハ人道ヲ無視シ
欧亚連絡交通ヲ危險ナラシムルモノナルニ付之ヲ
外交團ニ通告シ日本側過激ナル行動ヲ制限スル
應爲措置ヲ執ラレニ付テ望ム旨電報シ来リリ統
テ外交團首席ニ於テ右措置ヲ執ラレニ付テ要求ス云々

6

北平
本省

九月廿日
十月日前

幣原

矢野参了宛

才四七七号

中官後奉天宛電報才一
号二圖之

廿日自首席公使ヲ往訪
本件ニ付テハ目下本

國政府ニ於テ当該官憲ニ訓令
之真相調査中

ナルニ付本年官コ
情報ヲ供給スル迄ハ外交團ト

シテ何等措置ヲ講
セラルル様願交シト申入レタ

ル処同公使
之ヲ快諾シ日本側情報ヲ得

度十二付成
ルハク速ニ供給セ

件ニ付テハ他ノ外國合リモ同様圃込タルモ自方ハ是
等ハ何レモ出所同一ラシク恐ラク支那側ノ宣傳十
ルヘシト思考シ居ルニ付日本側ニ於テ速ニ真相ヲ究
表シ日本ニ於テ世界交通路ヲ妨害スルノ意ナキヲ明
カニセウヘシコトヲ希望ス自方差当リ、考ト、今ハ日
本側ヨリ其眞正ナル態容ヲ表明スル情勢報ヲ
得、右ヲ回覧ニ附スル以外何新措置ヲ要ナシト
思考スト語リ當カ官ヨリ本件ニ関シ他ノ外國公使
ト交渉セシコトアリヤト問、ルニ未タ何レトモ相違
コトナシト答ヘタリ、

6

奉天
省

十月一日前
左

解系

林總領事

才八二〇号

我軍飛行機より北寧線列車に爆弾ヲ投下し又

ハ機関銃ヲ發射シテ支那避難民ニ死傷者ヲ出シ

タル旨、報道傳はり居ル処我軍側ニ於テハ飛行

機ニ付嚴重取調ノ結果ニ依リ

一事件發生以來北寧線列車ニ爆弾ヲ投下シテ

ルコト全然ナシ

二十四日我軍飛行機が民府矣鯖野西方に

二 於テ敵狀視察中瀋河崗子 (Shenhe Gang)

(附) 北方約五百米突ノ部隊ヨリ敵兵約三十名ノ

射撃ヲ受ケタルニ付我飛行機ハ機南銃ニテ応射

セルモ約十發ノ射後故障ノ爲射撃ヲ中止セリ

當時飛行機ヨリハ西行ノ列車ヲ見タルモ射撃

ノ方向ト列車ノ方向ト力平行シ居ラサリニヨリ

大丈夫ト思ヒ応射シタルモノナル処多數支那兵

難民ハ列車ノ屋根ニ座乗シ居リタルヲ以テ或

ハ流彈力中リタルコトアルヲモ知ラス

三 我軍ニ於テハ軍用列車ニ非サル普通列車ヲ以テ

ニ龍撃スルカ如キ意圖ナキハ、
北寧線列車ノ運行安全ニハ、
意圖ニテ現ニ同線列車匪賊襲撃ノ際ノ如キ至
末得ル限リノ便宜ヲ與ヘ居ル実情ナリ。

6

南京
本

十月一日前
左

幣原

上村

才六四号

廿日、中央政治會議、(一)王正廷、外交部長辭職

ヲ許可シ後任ニ施肇基ヲ特任ス(二)張學良ノ稟請

ニ基テ國錫山、逮捕令ヲ取消ス旨決議セリ

昭和

六年十月九日閣議決定

同日奏滿

一、九月十八日夜半奉天附近に於ける日華兩國軍隊の衝突以來日本軍隊が滿鉄全線を自由に行動を開始せしむるに其四週に優勢たる中國軍隊が駐屯するに顧みず機先を制して脅威を陳かりしを爲す外に又當時中國軍隊は無抵抗主義を聲明せしを拘らず、事實に於ては隨處に抵抗を試み、日華軍隊の多量な死傷者を生ずるに至りし。

一、滿洲國政府は張作相王樹常二將軍を命じて

軍事官憲ト会同接洽、上現ニ滿鉄附屬地外
數ヶ所ノ地奥ニ出動スル日本軍隊、右地點撤退
後各地ニ於ケル治安維持ノ任務ヲ引継カシメ、ムコト
ヲ提議セラルルモ今直ニ中國軍隊力各地ニ武裝
集結セラルルニ於テハ假令其目的力單ニ地方治
安ノ維持ニ在リトスルモ日本軍隊トシテハ過般事
件ノ突発セル当初ノ情態ニ於ケルト同様再ヒ重
大ナル脅威ヲ感セサルヲ得ス殊ニ最近日華兩國
間ノ國民的感情ノ著シク興奮セルニ際シ兩國軍
隊衝突ノ危険更ニ大ナルモナラズ（一）

三、帝國政府、所見ヲ以テスレバ、目下最先ノ急務ハ日
華双方協力シテ國民的感情、緩和ヲ圖ルニ在
リ。之カ爲ニ速ニ兩國間ニ於テ平常關係確立、
基礎タルハキ點矣。大綱ヲ協定スルコトヲ要ス。
右大綱ノ協定ヲ了シ、從テ國民的感情ノ緩和ヲ
見ルニ至ラバ、日華軍隊ハ茲ニ安寧シテ全部滿鉄
附屬地内ニ歸還スルコトヲ得ハ、同時に右地ニ於テ
治安維持ノ任務引継ハ容易ニ且圓滑ニ行ハルベシ。

四、帝國政府ハ前報根本的大綱ノ協定ニ付責任ナル中國
政府ト直ニ會商ヲ開始スルノ用意ヲ有ス。

參考

一、兩締約國ハ極東方面ニ於ケル領事上ノ現状維持

並ニ全局ノ平和ヲ確保セムトシテ希望スルモノナルニ

付兩締約國ノ敦ム一方モ事情ノ如何ニ拘ハラス

他一方ニ對シ何等ノ侵略的政策又ハ行動ヲ

執ラサルトテ嚴肅ニ聲明ス。

二、兩締約國ノ敦ム一方モ

ハ自國民ノ法律秩序ヲ無視シ又ハ兩國通商

ノ自由ヲ妨礙スル方法ニ於テ他一方ニ敵抗ス

ル種ノ組織ノ運動ヲ制止セムヲ爲ト並ニ

(四) 学校に於て國際論ノ反感及誤解ヲ醸成スルカ如キ學課ヲ教授スルヲ禁止セムカ爲メ

一切及テ限リテ措置ヲ執ルヘシ

三、日本國政府ハ東北諸省ヲ含む中國ノ領土保全ヲ

嚴正ニ尊重スル既定方針ヲ更ニ確言ス、

四、中國政府ハ東北諸省内外各地ニ於ケル内ハ不居

住ノ旅行シテ商業、工業、農業、其他ノ平和的業

務ニ從事スル日本國臣民ニ對シテ其活動力公

秩序及安寧ヲ害スルカ如キ性質ヲ有セシメ

テ適當且有効ナル保護ヲ與フルヲ約ス

五、日本國政府及中國政府、兩國鐵道系統相互、關係、在於友好、協力、増進、且破壞的競爭、防止、此力爲、並、東北諸省內、鐵道、間、予日本國及中國間、現存、る、條約、規定、實、行、此力爲、必要、する、協定、南滿洲鐵道會社、東北諸省、關係、官廳、間、遲滯、する、結、合、する、。